

# 川柳塔

昭和五十二年七月二十五日印刷  
昭和五十二年六月二十五日発行  
大正十三年通卷六〇二号



No. 602

麻生路郎物語・完結

七月号

日川協加盟

戸田古方選・編集の

# 「普天句集」

好評発売中  
(非売品)

序 文 戸田古方

あとがき 戸倉仁一郎 (普天氏令息)

戦時中の作品に佳句が多く、30年前の日本人の生活がここにある。

(菊沢小松園氏が選に協力、不二田一三夫氏が編集に協力されている。B6判・約三百ページの美本)ご希望の方は千円・送料共(本社でお取次ぎいたします)

発行者 吹田市青山台四の二の一

戸倉仁一郎

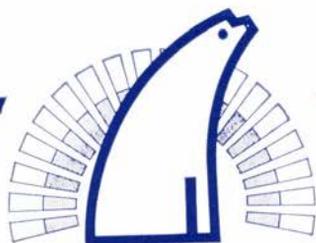
何を選んでいただくかは先様におねがいして  
タカシマヤの商品券をお贈りするのにも心にく  
い贈物かと存じます

一〇〇〇円から  
一〇〇〇〇円迄  
大阪・東京・京都  
3店に共通です



なんば 日本橋 朱  
大阪 東京 京都 四

高島屋



## HORAI



蓬萊商品の目印

# アイスクャンデー

あずき・パイン・ミルク・チョコ

# ソフトクリーム

バニラ・ミックス・チョコ



〈出張販売〉高島屋 そごう・阪神  
松坂屋・京阪デパート・奈良近鉄百貨店

大 阪・なんば



## ジーン

動物の毛を刈ったり、尻尾を切ったり、耳を切ったりするのは、別に動物が望んだことではないし、第一残酷である、という説に対し、二三年前、畑正憲さんが「私はそうは思いません、毛をきれいに刈られた犬が、それをきれいだと感じる人から可愛がられれば、私はそれでいいと思います」書いているのを読んだ記憶がある。近頃問題のジーン姿をふと頭に浮かべた。犬の美容と、ジーン姿を並べては失礼だが、うけとる人から愛されるという条件だけは必要だと思いが如何なものだろう。わかる句、わからぬ句という川柳がある。これとても同様にうけとる人から愛される句であれば、それでいいのである。

ぬかるみの果ての一日食いつなぎ  
頑迷が助ける神にも見放され  
白い眼で念を押ししてる設計図  
新たな夢炎えて童謡輪にゆれる  
旗振って本心ためす気の不逞

中島生々庵



川柳塔七月号



座右の句

酒とろりとろり大空のこころかも

(路郎)

私の句

濃い緑一色となり塔しずむ

西 いわを

## 川柳塔 七月号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

ジーパーン

中島生々庵 (1)

道

川村好郎 (2)

誹風柳多留廿五篇研究

(十五)

(26)

清博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原亮  
鈴木黄・室山三柳・入江勇・岡田甫

川柳塔 (同人作品)

中島生々庵選 (4)

水煙抄

菊沢小松園選 (30)

麻生路郎物語

(完)

東野大八 (22)

秀句鑑賞

(同人吟)  
(水煙抄)

西尾 栞 (25)  
水粉 千翁 (37)

愛染帖

橘高薫風選 (38)

「旅人」以後の麻生路郎作品 (39)

傍島 静馬 (38)

## 道

川村好郎

今人気女形のトップをゆく坂東玉三郎丈は元来歌舞伎の出であるが、最近では翻訳もの、現代ものに取組む意欲を見せ、歌舞伎の女形とちがった現代女性をも演じているが、昔の日本の女はこうだから現代の女もこう演じるのだと固執せず研究しているそうである。

一番困るのは歩き方である。現代の女性は一歩に歩く。外輪に歩く。現代の女性にはなかなか女形としては容易でない。あのバーの女、このクラブのマダムといったぐあいにモデルとして研究した。そしていくらか外輪に歩いても女としての局部を決して離さない。つまりひざから上の骨を密着させた歩き方、動作などをのみ込み、やっとな現代の女性が表示できるようなったそうである。

その玉三郎の父守田勘弥丈は、女形は四十歳になって初めて娘の表現がでけるようになる。又四十歳を過ぎてても常に若さを保たなければならぬ。若い頃の修業が十年、二十年と重ねてやっとな役に立ち、若い娘のしぐさが芸として表わされるので、若い役者が若い役

生駒から……………麻生 葎 乃 ……(29)  
ぎっぴつ・しゅんじゅう……………(41)

戸田古方・菊沢小松園・黒川紫香  
石垣花子・直原七面山

一分間の柳論……………堀江 芳 子 ……(51)

森井菁居……………(61)

雅号ぶっちゃげばなし……………大 峠 可 動 ……(63)

初歩教室……………本 田 恵 二 朗 ……(48)

大萬川柳「昼」……………川 村 好 郎 選 ……(50)

柳界展望……………(52)

本社六月句会……………(54)

各地柳壇(佳句地10選)……………植 山 武 助 選 ……(59)

「夜 店」……………藤 井 二 三 選 ……(46)

一路集「太 鼓」……………時 広 一 路 選 ……(46)

「短 冊」……………市 場 没 食 子 選 ……(47)

編集後記……………(二三夫・葉子) ……(65)

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思い

私の句

嫁がせた娘が気にかかる寒い風

草 深 醉 升

(路 郎)

をやれば自然さはあるが、からだはナマで娘の姿態をほんとうに表現出来ない。こんなことを若い玉三郎に常に誠め教えていたそうである。

どの道にも年期を入れ、修業せねばならないが、一事にとられて頭迷であってはならない。他に応ずる気がまえが大切だと思ふ。そこがなかなかむずかしい。

あるプロ野球選手で名遊撃手として名をうたわれた人が書いているこんな話がある。  
ファインプレーをして、観衆の拍手を浴びるようなときは、実は選手としては下り坂であるという。自分が選手として全盛だったときはファインプレーをすることがなかった。投手が投げた瞬間に、勘で打った球の来る方に、まだ球が打たれない先に行ってしまうので、球が来ても守備位置をほとんど動かずに球をとった。だからファインプレーにならない。ところが全盛期が過ぎて勘が少しにぶつてくると、球の飛んでくる方への移動がおくれるので、見た眼にはファインプレーとしてみえて拍手を浴びる。しかしその時は選手としては下り坂だということである。拍手に酔うより自戒せねばならないと思っていると。

どの道も遠い、そしてけわしい。無限の道である川柳へ私たち無限に求めてゆかねばならないことを教えられた。



中島生々庵選

松江市 中川晃男

倉敷市 小野克枝

白足袋がトンと決まって背が伸びる  
逃げ口へ退きながら吠える犬  
すぐバレる言訳やんわり受けられる  
髭剃ってサテ定年の行く先は  
送り出される背なへヒンヤリ春の風

松江市 小林孤呂二

深爪の女に魅力の乏しけり  
言訳の嘘に奈落の底がある  
エリート自信に直線ばかりある  
歯切れよい答えてポンと判を捺す  
終章を綴る五十と成る日から

東広島市 高橋鬼焼

歩こうよ若葉の詩が呼んでいる  
眠い目をこすると青い空がある  
鈍行の風さわやかに旅つづく  
歩道橋人間らしく渡らねば  
農をつぐ決意の汗を信じねば

雨洩りの記憶の中に住むふたり  
赤い服知らぬ世代のひがみかな  
罪いくつ解けてはくれぬ角砂糖  
美しい話にさえも母は泣く  
出嫌いと惜しい一日暮れました

新宮市 大矢十郎

両替えをして此の店が好きになり  
まずいそば食べた思い出残る街  
君が代へご起立願います平和  
裏門を言わず制服よく似合い  
鉄筋になってもお茶は世に残り

神戸市 小浜牧人

独房の涙を善と信じよう  
遠くから急所へ飛車が効いている  
子を叩く手加減にある親心  
足並みを乱さぬ一家の縄電車  
葉桜の静けさとなる花の寺

呉市 榎田 英詩

甘い汁たっぶりブームにのった人  
親の眉子の眉血筋争えず  
妻軸にわが家の暮しつがなし  
油差すように男は今日も飲み  
不幸にもほくろがあつた指名犯

大阪市 金井 文秋

六十の嫉妬は笑いながら聞く  
不況風いつまで耐えて居れと云う  
ワンマンの落ち目へ聞かず逆らわず  
分け合うて近所も同じ花が咲き  
新芽押し上げて老葉陰に居る

桜井市 岩本 雀踊子

フト見れば私の表札いがんでた  
妻病んで私が夫で御座います  
本当を話すと笑うからやめる  
置き場所を知らさぬ私の鍵がある  
僕のゼニ妻のお金がある家庭

竹原市 小島 蘭幸

静かに静かに静かに待っている女  
独身の最後を飾る不精罷  
祈りとも愛とも夫婦お茶を飲む  
ウエディングドレス涙が少しある  
花嫁の父を眼で追うのはよせよ

竹原市 森井 菁居

九官鳥 鳥の言葉を忘れかけ  
ロボットの歩幅は妻に見せまじき  
日々好日 妻の寝息があたたかし  
笑顔もしや男の演出かも知れぬ  
蘭幸君結婚祝吟

今治市 月原 宵明

君といて四季のめぐりが愉しかり  
たかぶりを一そ募らせ髪を梳く  
花の名を知って不幸な過去を持ち  
座布団を半分敷いて悔み客  
わたしには故郷があり麦の笛  
靴穿けば惰性職場へ向いてゆく

岡山県 出原 敬一

子を呑んだ川辺に可愛い花が咲き  
一夜明けても妻冷ややかな標準語  
涙して祖母ヒロインの身を案じ  
臨終の臉に黄泉の花景色  
北洋にふれて魚屋値を詫びる

今治市 越智 一水

すきのない寡婦は涙も枯れ果てる  
咳一つするに苦勞の美術館  
馬鹿だなど夫に言われ嬉しい日  
開けるにも閉めるも妻が鍵を待ち  
学歴社会どこ吹く風の鯉のぼり

竹原市 山内 静水

枚方市 宮川 珠笑

買って出た使者丁重に断われ

苗代を雀に知らず網を張り

奥様の夢みる如しつけほくろ

スイッチがあれば消したいほどしゃべり

満点の嫁に何んにもしてやれず

閉会の辞席立つ人を追う

相和して回すほかなし火の車

失恋の過去もつ社長の荒稼ぎ

しかと抱くよろこび父母のお在します

旅にいて働く人に無視される

京都市 松川 杜的

大阪市 中川 滋雀

晴れ着には晴着の顔がある女

まっすぐに生きてるはずの手が汚れ

ストリップも見せてもろたと祖母の旅

人形の視線に負けるガラス越し

(哲学の小徑にて)

撓められた枝の形で咲き誇り

八ッ橋が匂うて京の道うれし

一字一画写経へ心の穴を埋め

五月晴れ写して哲学の小徑澄む

とっときを酌ぐ友情に励まされ

「馬の足跡」「都わすれ」と哲学の小徑よし

倉吉市 奥谷 弘朗

岡山市 川端 柳子

行方追う切なさ例え手毬でも

風吹けど動かぬ天辺の月信じ

五月晴れ今日は汽笛の音を聞く

大山を大山さんと呼べる里

風の中走るに年をとり過ぎた

俺でなきゃ出来ぬ仕事を持つ自信

妬いてみる若さよ希望号発車

還暦へ句碑を残して男生き

買物に行つたとヨーロッパを話し

八尾市 大路 美幸

泉大津市 村上 春巳

爾臣民郵便貯金が目減りする

アベックへまたたいたりせぬ野の仏

割箸を割ると旅路の香がこぼれ

泣き笑い演じつづける夫婦劇

三千院静けさを探すカメラアイ

ああ中年こっそり抱く夢二の絵

休日の鹿人人人につきあたり

鉛筆を削ると童話が甦える

休日の鹿にうさぐさい顔をされ

米子市 八木 千代

カーブまだ半分残し暮れかかり  
思ひ出のぬくみ小出しに抱いて寝る  
気まぐれなみくじに小さい恋を賭け  
設計図老母の縁起に向きを変え  
定年後の椅子プライドと折り合わず

青森市

工藤 甲吉

神仏に合わせる娑婆の手を洗い  
雑草といえどそれぞれ氏素姓  
茅屋に住み貧しても貪はせず  
選挙ピラ次の角でも貰わされ  
老兵は消えて去らない呑みっぷり

宝塚市

傍島 静馬

無分別な家出へ潜戸開けておく  
金力に汗の奉仕が目立たない  
おべんちゃらざらいでうだつ上らない  
看護婦をからかうほどに持ち直し  
云いにくい人に云いにくいことを云う

香川県

三井 酔夢

はるばると来た足摺に月満ちぬ  
潮の香に残りの椿紅を増す  
いずこから来る波濤かな祈りかな  
海の宿君は詩人の軽きペン  
逆光の廻路は亡父のシルエット

八尾市

高橋 夕花

雨有情 ひとりポッチの胸にくる

白髪ひとすじ 我が手に余る亡母の櫛  
三面鏡ひらき淋しさの中にいる  
ひそかなる想いが匂う春日傘  
未来図に白鳥夫婦浮ばせる

(前月分)

八尾市

高橋 夕花

花冷えの薄いコートに包む愛  
春の挽歌女はきれいに笑うだけ  
執念を捨てると聞こえる風の声  
七人の敵に出で発つ息子はのどか  
ちちははに続く道ならひた歩む

笠岡市

松本 忠三

政治的解決黒を白にする  
連休が済んだ途端に五月晴  
行先を聞けば終点までと言ひ  
委任状一人前の口をきき  
ハイヒールへっぴり腰で田舎道

東大阪市

竹中 綾女

紫睡蓮平安美人佇ませたし  
手話の子の笑顔に車中和みゆく  
乱れ髪かき上げつつ逢う病み上り  
旅支度あれもこれもと重くなる  
カーテンを変えたと他人の部屋めいて

島根県

堀江 正朗

赤飯のあつあつがくる内祝い  
小さい音小さいながらに気を使い

旅帰り迎えるように蠅も来て  
病氣などするなと言った友が病み  
寝転んで米磨ぐ音をまるく聞き

大阪市 本多柳志

胸襟を開けば醜いものが見え  
妻の酌ぐビールに企みなどはなし  
神さまにされて娑婆から見放され  
眼鏡かけ更えて見直す叙勲記事

旅中吟

拝まさぬ秘仏へ拝む掌を淨め

大阪市 神夏磯道子

無関心時には心が寒くなり  
淋しさを廻す夫婦の風車  
うわついた心庖丁に叱られる  
放浪の子へ団欒の灯は消さず  
満開にためらっている花鉢

諫早市 原田明春

かさかさの指イミティションだけ光り  
鉢巻が首にさがってデモ終る  
五月晴れオシメはためく新世帯  
女房にひかれ故郷を棄てていき  
遭難現場アナウンサーだけ泣かずおり

東大阪市 斎藤三十四

督促の郵便怒った音で来る  
さりげなく偶然という素振り

絵心がすこし画廊へ立ち止まり  
肚芸という明るみに出ぬ汚職  
川の水動かずネオンの顔となる

和歌山市 野村太茂津

唯物論たかが魚を笑えない  
一ト言が多く自惚れ背を走る  
枯れ松を支えて心瘦せていく  
数えてる指一本が折り合わぬ  
デホルムが素直に見えぬ悦に入り

神戸市 仲 どんたく

おのろけは みようと喧嘩のこともふれ  
持ってますさかいに指輪三つはめ  
お隣の牡丹を盗むカメラアイ  
半別居下からじいちゃんごはんです  
一万歩犬の死からの怠け癖

倉敷市 野田素身郎

接待のやりがいがある飲みっぷり  
晴れやかな場所は嫌いな作業服  
夫には夫の理屈があるゴルフ  
絶叫をしたい日もある秘書課長  
わが道を行く孤立無援の道なれど

倉敷市 田垣方大

職業欄無職と書いてほろ苦し  
この野郎と思えど頭をさげる金  
叱られに行くにシグナル青ばかり

あわてない医師に怒りと頼もしさ  
独身を引掻きまわす初夏の風

倉敷市 稲田豊作

足踏みの轆轤廻して祖父八十路  
舌足らず同士で肚は通じ合い

転落の女が神を拒んでる

妥協点探して生きる狭い道

七転び八起きの夫と又転び

松江市 柳楽鶴丸

図書館記念日荷風次郎のお命日  
お月様娘をよろしく頼みます

春の雨春のリズムでほほを打つ

戸籍上では月足らずになってます

思いつきのページは白紙にしておこう

富田林市 板尾岳人

御仏の顔に似ているひとりの樹

水の味妙見滝と書いてある

滝落ちる遺言岬に霧かかる

母の楡人形峠に落ちていた

高島田着せ換え人形は山が好き

大阪市 大坂形水

そろばんをはじいた上の明け渡し

明暗を分けるボールが風に乗る

戦中物人気に梅干関係ない

でかい靴履いてる男のコンプレックス

ホワイトの上衣タップを踏みとなる

大阪市 不二田 一三夫

彼の場合 母三人を持つ不幸

もう一軒当たってみますと借りる先き

女は収入が増えそろそろ別れる話

テーブルの伝票 誰も手を出さず

保釈金を届け 女は姿消す

倉敷市 水粉千翁

感情を溜めて臉が開かない

あのとまのまに久方ぶりを酌ぎ

雑草のどんなもんだという呼吸

力んでる拳 私を見失ない

鳥取市 両川 洋々

悲しみの色も三回忌分ほどは褪せ

癌という言葉に触れず触れさせず

核実験叱る署名へ俺もいる

合理化無惨ああ働ける首を切り

島根県 藤井明朗

父の口癖おうむ(鵝)にしてやられ

核家族どこまでつづく農守る

無欲を見こまれ停年後の役がふえ

明治気質も色あせるまま床柱

(前月分)

島根県 藤井明朗

抜けるよな襟足迷いのまま別れ

冗談で気をひくつもり酔うている

花の下少しくおかれて妻の寿司  
春闘は終り値上げは熟してる

竹原市 三宅 不朽

能面の美しすぎて位置を変え

三回忌牡丹あの日のいろを咲き

質でよし亡父母愛蔵の壺なれば

証人になりますその眼すんでいる

神戸市 中村 ゆきを

気に召さぬ日の女王蜂近寄れず

いい人にされて深みへ落ちて行く

ほっとしたところへ敵の矢がささり

足あげて掃除すむのを待つベンチ

大阪市 柳原 静香

逝く春を惜しむ着物をたたみけり

子の温み両手に抱いて母の日よ

通院の夫に済まぬ程肥とり

保護過剰世に疎きまま妻で生き

倉敷市 松井 俊風

運動もしてはと靴を揃えられ

薫風にごろ寝もならず金もなし

病葉のささやき霧の中にさき

溪流に悲しいこだま棲みつけり

鳥根県 梶 みどり

夢にみる亡夫は呑気な顔にみえ

ワンテンポずらして期待明日にかけ  
笹の香をあつめて山道孫とぬけ  
姑さんと呼ぶ声日毎丸くなる

滋賀県 溝口 はやを

良心のとがめに外れる目を見つめ

好きだからすぐ酔う酒をつぎに来る

軟かく時には硬い骨で生き

帰りにはチラッと見ても吠えぬ犬

西宮市 若林 草右

老化脊に負うてまた乗る無料バス

ストもよし老化防止の一万歩

京ことばおこつてはつても笑われる

止めてみて飲んでみて血圧ためしてる

岡山県 嘉数 千代香

追いかけてくれる期待で逃げていく

爽やかな敗北靴の泥おとす

神様にすがる余生も生きがたし

まっすぐに歩いてかげりのない笑顔

鳥取県 林 露杖

葉桜が夏の装い急がせる

失業の斯くも虚しき暮の春

職去りて怠け心や梅雨ごもり  
考えて見れば幾日も笑わない

鳥取市 小林 由多香

効能と由来を聞いて温泉に浸り  
自信ない心つくらうからいばり  
縁起など気にせずヤングつっぱしり  
口癖と知っても胸につきさされ

米子市 石垣花子

御茶会の和服の群を追うカメラ  
再建の一步へ社長の作業服  
出不精の腰上げさせる花便り  
遊学の自炊へとどく母の味

平田市 久家代仕男

老境のされどロボットにもなれず  
絹ごしと木綿豆腐の味でもめ  
仲裁に馳せ参ずればのろ気られ  
妥協案蹴って話の裏を読む

大阪市 本間満津子

イメージとピントが合わぬバス旅行  
旅人のスケッチ気ままな彩で塗り  
ふる里で浦島太郎になりました  
二十四時ひとりじめして淋しけれ

兵庫県 河原みのもる

ホトトギスいつから聞かなく山に住み  
コケッコやモーと教えるすべのなく  
麦の穂は生け花として残るだけ  
8ミリへ吾が老醜を確める

和歌山市 内芝としよ

不況風吸いこむ意気の鯉のぼり  
友と来て旅の枕のゆたかさよ  
社運賭け青年社長のヘルメット  
ワンマンと自負して道を迷わない

島根県 堀江芳子

贅沢な愚痴へ健康忘れられ  
血圧のあがった訳を聞いてあげ  
旅帰りわが家の良さもほめてくれ  
雨の日の憂うつ捨て猫おまえもか

堺市 伏見茂美

愛憎のかげりふりだしに戻りたく  
一人寝のこのまま成仏できぬ夢  
寒肥につつじ満開というお礼  
問われても答が出せぬ壁ができ

竹原市 時広一路

人恋し千羽の鶴に囲まれて  
顔七つ持てる男で敵がない  
五線譜を雀の唄で埋める日々  
大空へ向って不遜なる欠伸

岸和田市 高橋操子

利喰いのショック献立やり直し  
檜山は昔話でなかりけり  
思い出があるからかばん修理する  
焼そばとビール週休二日制

大阪市 河野君子

小さくちいさく夫婦は円を描き直す

満月を八つ裂きしたし失意の日

花胞子おどけて初夏の風に乗り

死ぬときは五月の花に埋もれたし

大阪市 小出智子

縫いさしの袷をまたも仕舞い込む

露草の花によく似た淡き思慕

居眠りの母に余生をかいまみる

父よ母よと大輪の薔薇が咲く

寝屋川市 宮尾 あいき

先立った亡夫に気兼ねな母の日よ

踏まれても草には草の春があり

満月があるから三日月耐えている

男とは可愛ゆきものよ酒に酔い

尼崎市 黒川 紫香

蝶と蝶花の命を追い廻し

古井戸の深さに過去へつづきそう

すれ違う僧に秘めてる香り嗅ぐ

(隠岐にて)

心なしか松も騒がぬ火葬塚

高槻市 若柳 潮花

付添いもベッドへ掛けて話し込み

よせ書の名がなつかしい見舞来る

鈴蘭の振れば鳴りそう花をつけ

ひと足をたしかめてつく松葉杖

松江市 岡崎 祥月

嵯峨野路の寺寺ひまな人が寄る

職退いて空虚を埋める旅三日

ラッパ吹く父に歩調がみな揃い

信じ合う二人で神の知恵を借る

鳥取市 河村 日満

弘朗君の句碑建立

北壁にいどむ男の句がひかり

この人の口からも出る安楽死

平凡がいいとは老いた言葉かな

票あげる立場うなずくだけで済み

倉敷市 小幡 里風

雨だれのくぼみ少年見て飽かず

無人駅都会の涙捨てに来る

胸坂へ屈辱刻んだ日の自嘲

バーゲンを鵜の目で漁る時

女 藤井寺市 児島 与呂志

ブランコが揺れて子どもの空が飛び

初夏の陽に金魚が釣れた大和川

遠ざかるロマンに夫婦の老眼鏡

朱を入れて極楽行きの石を買い

和歌山市 若宮 武雄

どん底に這うて身に沁む地の温み

すべってから転ぶ間の策の無さ

裏のうら見たばっかりに又迷い

野良犬の自覚 人間へ尾を振らぬ

大阪市 川口弘生

一家言持って不協和音で居る  
法被着せる力が駅前掃除さす  
信じたい心が仏の手を探る  
軒借って人間不信の雀です

東大阪市 竹中肖二

山の辺の道(一句)

山の辺の道にとどろく耕運機  
絵心が欲しいと思う良い景色  
先輩の苦言の裏のあたたかさ  
リードしたゆとりで後をふりかえる

八尾市 香川酔々

祭笛天に届いて地に還る  
白鳥が生きる千代田区一番地  
家出した猫の足跡探してる  
箸紙に再会の日の歌がある

大和郡山市 森田カズエ

若いから死を美しいものと云え  
職安でもらいあくびをしてしま  
悠々と流れる雲をみるゆとり  
週刊誌積んで点滴うけている

大阪市 西出一栄

チラホラと日傘が咲いた外野席  
はか無さは自分の杖にけつまずき

古いぬれば一円玉にさも似たり

才女にも魔女にもなれずただの婆婆

和歌山市 津田与史

妻の鏡だんだん小さくなってくる

老醜を映す鏡は近づけず

枯木に花咲かす望みはもう捨てる

蚊張に螢入れて明治の負け惜しみ

島根県 大森孝華

バッチリと打った布石へまだ迷い

若い気が赤信号へ虚を突かれ

ふる里の対話が匂う受話器抱く

いそいそと同伴同士馬が合い  
岡山市 時末一灯

点滴へ欠伸添うほど恢復し

涙涸れてからの女の厚化粧

まわり道でしたと女背なを見せ

プッシュホンすんなり訣れが云えそうで  
愛媛県 渡辺暁童

あとは酒など のめと妻発ち

赤札の値に だまされてみる

老いも嬰兒も 使いすて以下

ワンマンパバの 暮改朝令

和泉市 西岡洛醉

蔭口の囁き唇枯れて来る  
老妻と旅 忙中閑を知る

血みどろに男は生きる職求め  
美の素顔かくして女夜を生く

東京都

山根 白星

あらと言う眼をしただけの人違い

シンデレラ眼の落ちつきのなさに居る

愛着の売られて深い蔵書印

遺作展無題の前の金しほり

富田林市

和田 維久子

思い切り塗ってピエロにされている

巢立つ朝 子のネクタイにそつと振れ

髪セット時計進ませ明日の旅

日の永さ短かさ かかわりない旅路

守口市

羽原 静歩

五線紙へ弾むいのちの譜を刻む

染めあげて老舗の心継いでいる

美容院日本一のポーズする

真実を語ると虹も透いて見え

伊丹市

榎谷 漫柳

私の彫り跡もあり妻の顔

貫徹の鉢巻が包んでいる空虚

おだやかに来たら妻淋しそう

花に水遣る時心にも花

大阪市

河井 庸佑

社会が悪い政治が悪いと酔うてはる  
知っていて何も言わぬから不気味

このつきは何があがるか気をもませ  
物価値上げついでに給料やや上り

(前月分)

大阪市

河井 庸佑

新緑に家におつても落ち着かず

何となくいっしょにいてるだけで良い

あてもなくただ何となく家を出る

女三人電車の中の賑かさ

倉敷市

藤井 春日

育たない訳は机に縛られる

生前を花環の数で評価され

湯煙の中で人生の雨宿り

落魄の酒の飲み口まで変り

島根県

錦織 文子

目をつむり今日を心に問う夜更け

孫の手を握って歩く幸があり

風のない暮しを倅せとも言えず

これっぽちのとげだったのか指の傷

大阪市

有信 新之助

教育を盛るにはお皿が小さすぎ

この広告に騙されるのもいる一億人

受賞の涙ファンの知らぬ意地もある

譲らぬ座席新しいモラルかも

西宮市

島居 百酒

吊橋が秘境の哀話の風に揺れ  
盛運のときは奇跡も応援し

射程距離だが標的が定まらず  
寝める気の無学の言葉におちよくられ

和歌山市 小川 佐知子

逆らうて逆らうて心満たされず

おちて行く心へ鏡曇るだけ

ガスの火を消したかしらと途中下車

左遷させホームで握手する度胸

守口市 野呂 右近

久し振り見る外孫が他人めき

御互の癖庇い合い丸く老い

残り火もまだ燃え恋の句も綴り

逆境は悲し聞耳立てたがり

竹原市 鈴木 かつ子

おせじでも美人と言われたうれしい日

未練今たちきるドラの音が悲し

さざ波の追いつ追われつする未練

倅せな汗初孫と歩を合せ

今治市 長野 文庫

からだ中補強をしたいとこばかり

頼もしい働らく父の無性髭

安心をして屋根裏に雀寝る

全力がこれかと腑甲斐なさなげく

堺市 高橋 千万子

母の日に亡母を慕うて墓参り

窓口の親切足取り軽くする

紋付を喜怒哀楽の顔で着る  
絵の具では出せない色の熱帯魚

西宮市 藤村 め 女

カンナ燃ゆ灼熱の恋も無き庭に

露天風呂の裸身へ迷う陽の光り

ほれられてみたい化粧に念を入れ

荒さむ日の私の影に鬼がすみ

豊中市 安藤 寿美子

閑そうな男豌豆むかされる

掃除機で座敷の蟻は吸い取られ

大家族日本酒ビールウイスキー

うそっぱち信じて女たのしそ

出雲市 原 独 仙

さみだれへもぐさの匂う隠居部屋

一人だけ叱り皆んなも聞けの声

心にも化粧を厚く夜の女

流し眼で常識のほど疑われ

貝塚市 野坂 つき子

色気なく笑いひとりで観るテレビ

一言の重さ知って喋べれない

どさくさの中で貴方と呼べました

当分は想い出だけに染まりたし

水見市 関 美 子

とりどりのみどり重ねて山の夏

男くさいうちわを借りた通り雨

赤を着てうなじに残る貼り薬  
話題は宝石 員数外でいる

倉敷市 能登原 白水

緞帳が降りて父の訃を祈り  
メーデーを空の蒼さに見おろされ  
鼻こけの地蔵に祈る母独り

この月をあの世の母も視てるかな

八尾市 宮西 弥生

吊り橋を渡る鬼の手を引いて  
花冷えの部屋に燃えてるシクラメン

反省の対話で今日をしめくくる  
叱るひとしない淋しさ灯が消える

橿原市 岩井 本蔭棒

ふる里の駅を不義理が通過する

極道も人の子不孝詫びて死に  
寝ていても腹の減るのがおかしけれ

同期の桜遂には声がつまるなり

貝塚市 行天 千代

温度計春飛び越えて夏が来る

バスの旅もうすぐマイク我の番  
三度目に来て念願の富士を見る

遅刻した罰に上座へすわられ

柳井市 弘津 柳慶

いつのまにか妻が主権を握って  
無死満塁そこでテレビは時間切れ

ノホホンと年金当てにしておれず  
孫だいて音痴童謡口ずさみ

美祿市 安平次 弘道

賽銭箱神も不況へ策がなし

落花狼籍風に遺恨はなかりけり  
青葉若葉毛虫は蝶の夢を見た

奉賀帳のトップ成金さげすまれ

米子市 小西 雄々

すぐすんで癌と違うか胃の手術  
弔電を打ってゴルフの仕度する

いい葬儀でしたと花輪の数も入れ  
信用で守りとおしてきたのれん

松江市 恒松 町紅

手紙でも書こうかそんな親心

親と子とカウンターで呑む平和な日  
真剣に聞いているはくれぬ目が動き

岸和田市 福浦 勝晴

年輪の若さむきだす修業僧

ただ美人というだけで取り得のない女

ある倒産社長のひっそりした葬儀  
死ぬのにも汐時がある運不運

京都市 山本 規不風

刎ねたのは無免許死んだのはたち  
満願の絵馬へ夫婦の気が合わず  
それからは敷居が高いと女来る

春うららだるまお前も横になれ  
玉野市 小谷 仙山

投票で会長さんを押しつける  
もの言わぬ人形としゃべる五月晴れ  
藤井寺市 西 いわを

閉まろうとして又開く自動ドア

西 いわを

華やかな飛翔に酔うて親つばめ  
天王山恩師の揮毫うやうやし  
唐津市 新岡 回天子

(恩師十三回忌厳修)

腹の子の分も食べてる嫁であり  
祝電も有難くない古稀の宴  
鳩一羽飛ん来るのにもうなれて

唐津市 新岡 回天子

生きる為ひとさまさまに嘘をつく  
あれこれと塗ってはいるがまずい顔  
老いの暮らしに数歩ずれている施策

富田林市 岩田 美代

大阪市 西川 誓二

五月さんさん悪友こうも素晴らしい  
それぞれの余韻にぬれてる雨五月  
現実に戻るに余韻しがみつき

柏原市 大崎 可動

岩田 美代

凡人の一善が光になってゆく  
自信過剰は憂き世のオモチャです  
堅実な一步を亀が持っている

大阪市 横地 雅風

大崎 可動

気分転換にサンドウィッチなど作り  
支店出す仕度へ息子の勇み足  
取越苦労如来さまにおまかせし  
大阪府 天正 千梢

野宿する男昔の詩を持ち  
算盤に愛情までも巻き込まれ  
世話好きも留守居の妻に世話をかけ  
兵庫県 大 江 秋 月

雑草と妻の智慧との根くらべ  
連休は腕時計まで休んでる  
踏切で野犬も一時停止する  
大阪市 藤田 頂留子

許してはいても素直になれぬ意地  
鮮やかに入り陽をえがく大自然  
美しく今も湖底に見る哀話  
和歌山市 吉野 富子

美味そうにおせち料理をたべる義理  
借りた義理返せばええわですまぬ義理  
口癖の忙しいほどには動いてず  
大阪市 横地 雅風

以下同文された祝電無念そう  
山陰で二度目の雪見る梨の花  
用足しもそわそわ座席へ一人旅  
兵庫県 遠山 可住

戦友という細胞が生きている  
マージャンに負ける男で栄転し  
末端の方は肩組み腕を組み

米子市 増田 竹馬

不言実行口下手胸を張って生き  
首に鈴付ける役目でもめ直し  
板前に真心と云うかくし味

松原市 玉置 重人

新婚の幸がこぼれたペアルック  
灯を寄せて易者女難に力入れ  
雑踏の中で孤独な歩を運ぶ

鳥取市 佐々木 静泉

少しでも高くなろうよ葱坊主  
焦躁を捨てたい酒にまた焦り  
女系家族 やっとたてられた鯉のほり

大阪市 江城 修史

つき刺さる不況がひびく居職の灯  
居職する視界にみどりのある救い  
嘘一つ信ずる妻の目に刺さる

松山市 谷 のぶお

勉強べんきよう麦笛を吹く児はいない  
知りぬいていたはずだった迷い道  
湧きあがる若葉散る日を思わない

大阪市 黒田 真砂

母の日の厨は子等にまかせ切り

一か八か かける女の浅い知恵  
武器すてた女に別の平和あり

岡山県 竹内 翁童

五月晴れ日曜農家を休ませず  
温泉のネオン財布に話しかけ  
内職も限界物価を追い越せず

島根県 小砂 白汀

切り花のはかなさ造花の執拗さ  
潰ぶされるなどは知らぬこがね虫  
焦点をまさぐる二重めがね買う

島根県 榊原 秀子

畑を打ちそらごとにきくメーデー歌  
倅せへ酔わすつつじが炎えてみせ  
夜泣きそばしとしと雨へ泣く音色

大阪市 那須 鎮彦

十字路で女鬃りの道を選る  
足元に花園がある落ち椿  
晩酌がうまく飲めそう夕焼ける

鳥取市 大塚 豊生

行く道を決めて個性の道が伸び  
吟行の孤独を山が抱いてくれ  
安全運転家訓の一に掲げられ

姫路市 梅谿庵 不酔

くどすぎるほんならうちもやっちゃるか  
昭和の子自由の靴をはき違え

おむつしたお前に俺の幸をかけ

高槻市 福田丁路

天地神明に誓って野次られる

草に寝て緑の風にくしやみする

逝く春に命を張って咲く椿

宝塚市 小島無聖

悔い残る小さな約束破る日よ

姿見に男にみせぬ所作をみせ

矢車の伴奏やんで鯉は垂れ

豊中市 戸田古方

デザートを食べ食べ生きててよかったね

防音壁誰にも景色など見せず

痩せましたんやと上衣つまみ上げ

大阪市 津守柳信

臭い物蓋をするから尚齧り

損得は抜き笑顔につり込まれ

お悔みがスラスラ云えてわびしすぎ

大阪市 室谷徹舟

近くより遠い名所へ行く花見

芽を出した盆栽びっくりする寒さ

観潮のシャッターチャンスへ船のゆれ

鳥取県 鈴木村颯子

川柳と顔に書いたがやって来る

無数の手が正義の吊皮にあえいでる

泥服をまえば心和むなり

和歌山市 沢山福水

烈帛の気合いが響く武徳殿

本流を逆らうバカと追う阿呆

紀州路の陛下へ空も晴れ渡り

鳥取県 清水一保

将来を競い合ってる鯉のぼり

日々好日我が清貧苦にならず

雀にもドラマが始まる朝の軒

生駒市 草深醉升

のどかさを宣伝のへり搔き乱し

あの時のあんたと世間は狭いもの

連休かそうかと余生の鉢いじり

大田市 藤田軒太楼

膝へ来る孫の体温抱き締める

郷愁を誘う夜店の豆電球

恋知った娘の短冊もあり星祭り

下関市 國弘半休門

夕焼けて農機通勤車に仕立て

負け惜しみ聞いてやらねば淋しかろう

踊り子の持つ絵日傘へ花が降る

東大阪市 落合思月

寄附金をはずんで蔭で笑われる

古日記命を賭けた恋ばかり

幻の人が恋しい青春期

大阪市 神田秀峰

人生は喜怒哀楽で暇つぶし

島国も歩けば長い距離が付き

意見すりゃふくれるだけでうなずかず

(前月分)

和歌山市

小川 佐知子

忙がしい筈が喫茶で鉢合せ

老醜をさらし椿のまだ落ちず

戦前派もつたいないで又肥える

岡山東

直原 七面山

未亡人たった一人の灯をともし

今落ちればもうい女と言われそう

残る色香をマダムはフルに活用し

仙台市

川村 映輝

メーデーは要求だけでゴミの山

まわり道したが七十で追い越せた

昔語る人の集まり淋しいな

西尾 葉

なり歩いま刺客のように寄ってくる

香車いま宝蔵院流という構え

頓死筋ねらって桂馬もっている

抜剣の姿で銀将おどり出で

最後まで従う金将質駒さ

若本 多久志

病中吟

気落ちして見舞の文に涙する

これしきのことにと老いの片意地が

安養の浄土と聞けど行きとなし  
まだまだと娑婆が恋しい凡愚なる  
親鸞も同じ思いの嘆異抄

伊藤 茶仏

善悪の思料スリルがかとわかす  
円高の差益ネコババしておどけ  
信仰の山 土砂降りの風を衝き  
鉄塔の撤去成田の寝込蹴る  
剃髪の色おんなでない尼僧

尼 緑之助

僕も一人 川柳塔六〇〇号  
老農の自信日本は米の国

住宅がぐんぐん耕地理めて行く  
日本の家ひろがって地凶になる  
二組の夫婦で綴る家族の賦

浜田 久米雄

倒産は金に憑かれてる亡者  
丹精に込えてさつき笑いかけ  
九層倍のくすりに命奪われる  
定年が近づき内助あわてない  
蛇の目傘昔の雨をなつかしむ

本田 恵二朗

あす嫁く枕へまわる走馬灯  
初孫が肩にくい込む子守唄  
他人行儀そんな演技も夫婦仲

針のある一言鼓膜突き破り  
泣き笑いまた泣き笑い老いの坂

隠岐国賀

摩天崖 頂き近き霧が巻く  
岩肌を荒涼感が吹き上げる  
息をのむ険しさで断崖のしかかる  
海蝕洞 心の底で舟がゆれ  
洞窟の闇 感動が溶けてゆく

緑の絨氈に孫と座った春日和  
体力に自信をつける旅に出てみる  
引伸ばす写真ポツポツ探しとく  
裏腹に余後の身体がついて来ず  
順待ちの欠伸数えて診療所

鶴屋八幡中に夫婦の小さな灯  
毎日が新あたらと老いに言い聞かせ  
ここだけはめでたい声がする産科  
行く先は一つ長い滑走路  
忘れてる思い出してるひとと会い

着飾った極楽鳥は唄わない  
いっそ気楽にばらばらに死ね  
時間通りに着けば人影なき舗道  
老春のあがきにも似て赤いシャツ  
金持って来たか挨拶ぬきになり

正本水客

小西無鬼

川村好郎

菊沢小松園

麻生路郎先生の不朽の名著



(普及版)

—A 6 版—

頒価 ¥1,000

(送料共)

「旅人」とその後の作品を百句追加してここに  
再現しました。

序 中島生々庵  
跋 西尾 棗

売り切れました。

(ご返金申しあげた方々におわび致します)

川柳塔社  
「旅人」普及版刊行会



( 筆 者 )

# 麻生路郎物語

— 路郎作句語録 (下) —

(31)

東 野 大 八

○：選者が自分の好きな句だけとるのはよくない。個性のある句なら少々キズがあってもとってやる。その人でなければ作れない句があるものだ。それを伸ばしてやるのである。私は句を選ぶより人を選ぶ。そうすることによってかつての私の門下で、川柳界の一茶といわれた、須崎豆秋君のような作家が出てくる。

○：近ごろの川柳家の川柳は「笑い」から遠ざかっている。それはよくない。しかし、これも時代といえよう。なぜならば、ほんとは心から笑えない時代だからだ。なんでもストビード化してしまっている。あんなオートバイのようなものに乗っては、周囲が見えないのはあたりまえじゃあないか。笑いたくても笑う余地がない。

○ガガーリンは、「地球は青かった」といったが、あれは私にとって一つの感激となった。

た。もし二番目のだれかが行って「地球は赤かった」というかもしれないし、三番目の人は、「黄色かった」というかもしれない。このように川柳家は、人の感じないものを感じてつかまえないといけない。

○：川柳一筋といったが、一筋にもいろいろある。太い、短い、細い、長い、価値のあるもの、ないもの、まっすぐなもの、曲っているもの等々。それをいかにやっていくか自己の生活、人間を作ることに考えおぼしたら川柳も本物になる。

○：川柳は人間を「陶冶」する手段だ。句の上に自分の悪い点を出してみせる「君もそうか、おれもだ」と同じように人間同志が胸をうたれる。お互いに反省していい人間になるようにすべきだ。

○：人に通じない句なら作る必要はない。自分のアクを出しきると人の句になる。いい

句を作って共鳴し合うことが大切だ。(昭和37年「川柳雑誌」424・「北方の感激」一師を青森に迎えて―の講演要旨・整理工藤甲吉)

川柳を創るのには、発見ということが大事だ。勿論それだけですぐれた句ができる訳ではないが、新しいものを見つけることは、必要条件の一つだと云うのである。

それは絶えず奇抜なものを見つけているという意味ではない。そこらにゴロゴロしているものでもいい、誰もが、まだ気づかないものを発見しろというのだ。

はじめて海鼠を食った人のように、はじめて西瓜を割って、あの真紅の中味を食った人のように、社会から、人のアタマの中から誰もが発見しなかったものを発見しろということだ。

発見ということは、なかなか難しいことで

もあるが、案外やさしい場合もある。本人が少しも気づかないのに、第三者がなんの苦もなく発見する場合もある。(昭和31年「川柳雑誌」404)

私の門下の若い川柳人が別に何々記念というのではなく、自己の作品を世に問うために勇敢にも句集に踏み切った。そしてハツラツたる作品が好評を博し、我が社の刊行した柳書中ではトップを切ったのであった。

この青年は、既に第二集刊行に向って前進を開始しているのであるが、彼いわく

「私の母は私の第二句集刊行の一助にと、毎月五千円ずつ貯金をはじめました。すばらしい句がたまるまでに、刊行費の方が先に行くのではないかと心配しています」

私はこれをきいて思わず熱い涙がまぶたを濡らした。この母の愛情、この子の幸福、川柳人は多いが、そうした親子なんて、そうザラにあるものではなからう。句を作ること、句会へ行くことさえも、親が反対したり、妻が不満だったりする話はチョイチョイきくがこの青年のような話は、永い川柳生活をして

いる私にとってもはじめてのことである。句集を何等かの記念で刊行する時代はもう過ぎたようだ。私は必ずしも記念出版を否定しているのではないが、句集はその人の環境によって、経済力の許す範囲において、自由に刊行するのがいいのではないかと思う。

(昭和38年「川柳雑誌」438)

新聞が時事吟を募集するのはいいが、川柳になつてゐるのは、雨夜の星ぐらいで、選者泣かせに過ぎない。一般から募集するより選者に作らせたらどんなものであろう。

昔、大正日日新聞で、半文銭がすばらしい時事吟を発表したことがあるが、新聞へ投句するアマチュア川柳人がそんな放れワザは出来っこない。私も大阪新聞で二カ年間、山陽新聞で三カ年ほど、毎日放送で半カ年余り時事式のものを作らされたことがあるが、予想以上にむずかしいものだ。

締切りまぎわの時事では、事件の予測までして作らねばニュース性を失うので、作家であり記者である素質のあるものでなければ、素晴らしい作品はできないと思う。すくなくとも横山泰三氏の社会戯評を向うに回わしてどうほどの時事吟でなければ、時事吟としての価値はないのである。

ある新聞記者が自分の社の新聞の時事を見て、こんなのが川柳ですかと、ついでに川柳まで軽蔑していたが、もっともだと思ふ。

(昭和38年「川柳雑誌」442)

― 俺に似よ俺に似るなと子を思い

の句を「俺に似よ俺に似るなと子を育て」とあちこちに引用してくれたものだ。こんな具合に不用意に改作されては褒めてくれていても、おかしな苦笑しないでいられない。他人の句を引用する場合には、必ず原句を照合してみるだけの用意をしないと、エチケットに外されるだけでなく、論理が徹底し

ないことになる。

私のこの句を、近ごろは新かなづかいで、「思ひ」を「思い」と書くことにしているが揮毫の場合には「思ひ」や「おもひ」と書くこともある。最近「親に似よ親に似るなと子」を思ひ」と引用された柳人があったが、ここまできると滑稽だ。

うちの雑誌へくるのなら訂正もできるし、笑ってすむが、編集者が原句を知らずに、そのまま載せたとなると、寄稿者だけの恥では済まないことになる。他人の句を引用する場合には面倒でも、一応原句の所在を調べてみるべきだ。(昭和36年「川柳雑誌」415)

生前八十回ほど宿替した食満南北が亡くなったときに、私は靈前に向いて弔句を二句詠んだ。その一句は

― 宿替もこんどは番地ないところ

だった。告別式に列席した多くの人たちは、いずれも南北に親しかっただけに、この句に接して思わず声をあげて笑った。暫らくは南北の告別式らしい朗らかな空氣が漂った。

私の句は勿論、南北の死を茶化したわけではなく、彼のために借金とりの来ない浄土の安穩を祈ったのであった。ところがこの句が、他誌に無断で掲載されたが誤記されていた。勿論、悪意で誤記されたわけでないことは判るが、作者の私にとっては遺憾であった。あとできいたら柳人でない人が、短冊から写したとのことであったが、編集者の不用意は免

れない。

その後、南北の句碑建設の時にも、同志を募る一文の中に引用されたが、これ又、誤記されていた。その誤記は、他誌に誤記された句とも違っていた。僅々十七字に身を削る思いで一字もゆるがせにしない短詩人の心は、そうした心ない人々によって、たやすく踏みにじられてしまったのである。

敢て、私の句が名句だと主張しているのではない。私の句にしても誰の句にしても、その人、その人の血の流れた句を、心ない人々によって粗末に扱われることを心外に思うものである。(昭和36年「川柳雑誌」415)

現在の柳界をリードする人達の大半は、年令的に云って選暦前後である。齡い六十、頭に霜を頂いてなお、川柳、川柳と叫び続けている点はいかにも悲壯であるが、それらの指導者のすべては、果して思想的に、創作的に飛躍しているかどうかは疑わしい。

これらの人達は決して経済的保証があったわけではない。やむにやまれぬ川柳創作の魅力は、遂に柳界の指導的立場に立たざるを得なくなったのであるし、また立たざるを得なかったのである。

それだけに彼等の努力が——それ自体絶大の努力を払っていると思考したとしても、全柳界からみて、思想的に、創作的に微々たる漸進にすぎないことはいなめないのである。静かに回想する時、ある者は思想的に、創作的にも、一時は熱狂的に革新を称えたこともあ

るにはあるが、兎糞の革新は単に異を樹て、一時柳界を騒がし、兄弟かきにせめぐの醜態を演じたにすぎなかった。ある者は作品第一主義をとらず、単に党派的、集团的勢力で、僅かに虚名を勝ち得たにすぎない。今日、指導者の立場に立っていると自負する人達の中にも、この種の人々の墮力的な存在であったりする人達もいないとはいえない。

私はそうした人々を徒らにむちうつことを以って拙文の本旨とするものではない。むしろ、そうした人達にしても、彼等は彼等として柳界に貢献をしたもの、またしつづつあるものと思考していることを思うのである。しかしながら彼等の思考する柳界への活動は、火災の際、風下へ荷物を運ぶようなものであって、よしや彼等自体どんなに懸命であつても、何等柳界にプラスするものでないことをいつておきたいのである。(昭和29年「川柳雑誌」297)

川柳の世界は芸術的にみてどれだけ伸びたか。ふりかえてみてじっくりたるものはないか。しかし、親が子を思うような眼で観れば全国の柳誌のそれぞれが、幾らか上向けになったように思う。なかには思いがけなく背たけがのびたような感じのするもの、ないことはないが、それが果して今後どれだけのびることか疑わしい。

ここ数年を顧みると、明治から大正へかけて活躍をほしいままにしていたベテランが、秋の落葉のように散っていった。それは、私

たちにとって無限の淋しさを感じさせるが、自然の法則は、私たちの世界にだけ甘いわけではないから、あきらめるより仕方があるまい。

とりのこされた私達は残照として、最後までの努力を惜しまず、次代への礎石を築かねばならないし、これを受け継ぐ若い人たちは真冬の厳しさにたえしのんで春の芽生えに、躍進また躍進をつづけてもらいたいと思う。私たちは若い人たちの、奔馬のような躍進を期待すると同時に、行き過ぎだと考えたら、これまた引きかえすに勇敢であることをのぞむものである。芸術の世界における足踏みは禁中の禁であることを、特に警告したい。(昭和35年「川柳雑誌」403)

麻生路郎がその柳魂をこめて世に贈った、「川柳雑誌」は、四百六十号の麻生路郎追悼号をもって終結するが、その全巻を貫徹した路郎作句語録は、今なお熱く鋭くわれわれの胸に迫るものがある。この情熱こもる言葉をもって本稿を完結させた。多年にわたる御愛読を心から深謝したい。

(おわり)

★

(編集部から「菊沢小松園氏が云われたように、麻生路郎物語」が完了したら、本誌上にポッカリ穴があくのではないか。だが次号から筆陣新たに、またご執筆ねがうのでご期待ください。

同人吟

秀句鑑賞

前月号から

西尾 葉

君を得ていのちの重さ知るのなり

結婚をしますと春の風

五月の風景に貴女をひとりおいてみる

こんな時泣ける男よ素晴らしい

小島 蘭幸

以上四句は、作った句でなくて、生れた句であります。オールドックスな川柳という見地からいうと、色々と思見があるかも知れないが、私の意見をいうと川柳とはそんな視界の狭いものではないと断言する。これらの句は、自分の生涯の記録川柳であって、結婚という第二の人生の感激を詠んだもので、巻頭にもってきた選者の見識と温かい心にうたれるものである。

柔かな雲にキリンの首とどく

香川 酔々

一読ほほえましい、メルヘンの一駒を見る思いがする。キリンのあのひょうひょうとした顔と首なればこそ綿菓子のような柔かい雲

がマッチする、作者はこういう風な童話的な句も上手である。その方向に進むも又一考である。

穴あけてもぐらは古都に住み

も、ユニークな彼独特の境地である。

居直った私を私ももて余し

三宅 不朽

性は善なり、私ももて余しの、もが非常によく効いていて、情景が色々と面白く想像される。夫婦間の一寸した嘘を言った時の居直りであるが、唯単に嘘を言うただけではこの句の価値がない、居直ると言うオーバーな言い方がこの句の身上である。川柳塔作家中の十指に入る好作家である。四句目のてのひらに虫あそばせて花の午後なども、ものうい四月の花の午後情景と、病後の作者の心境がよく出ている。

伝統を守るにお面がいる神事

森田カズエ

ちよっぴりした穿ちの句であるが、嫌味のない微笑みをとまなう穿ちである。神事ではないが、壬生狂言などの、とろろすべり、ほうらく割りなどが思い出される、佳吟である。春うらら地球大きくなつたよう

西出 一栄

ユーモアのある、所謂感じの句で、川柳は正に視野無限である。こんなおおらかな佳句を詠みたいものである。短冊に書いてあげるときと喜こばれる秀吟である。平素心臓の弱い作者としては素晴らしいスケールの大きい句をものされたものである。

生々流転どんぶりこどんぶりこ

工藤 甲吉

どんぶりこ、どんぶりこという言葉は私達子供時代に桃太郎の話で、桃の流れてくる形容詞に使われたことをおぼえている。

生々流転と大上段に構えて、どんぶりこどんぶりこ通俗語でいなされた手法は流石ベテランの手腕と敬服する。どこかに悟りの余韻がある。

嫁はんになればなんとかなるだろう

神谷凡九郎

判じものや、詩人ぶった背のびした難解句の蔓延せんとしている柳界に、こんなわかりやすいユーモアで又当世の娘氣質を素直に詠んでいる句が嬉しい、食べ物インスタント物があり、着るものはL寸までであるレディメイドの時代ではなんとかなるだろうが本音でしょう。その他の佳吟に。

生き方の違いを敵のように言う

豪華建築子供育てる家でない

的ちよっとはずして心確かめる

帰れなくなるから往復切符買う

福太郎以下素晴らしい名に育ち

春めぐる母なる匂い蓬摘む

医者のせい電車で逢うて話し合い

初夏のかせ贅肉ついていたと思う

専務さんの指が汚れている不況

美人警官につかまりたいよな春の宵

お嫁さんくる立ち話あたたかし

ラッシュアワーOL押されてばかりいす

ゆきを



紀内恒久

俳風柳多留廿五篇研究

— (十五丁) —

262 羽二重の腹を木綿で六月すれ

室山―「羽二重（のような）腹」は嫁の腹で妊娠五か月目。岩田帯をしたのである。ああもったいない、といった気持を「羽二重」と「木綿」で匂わせている。

犬は産が軽いというので、

戌の日に嫁恥しひ帯をする

六八・14

犬の日に里から二疋白と赤

一六五・1

入江―賛。羽二重餅のような腹に木綿の岩田帯をまく。五ツ月から産み月の十月まで結ぶから六月すれといった。

はづかしさ嫁は木綿の帯をしめ

五二・18

青木―「六月すれ」入江氏説適解。

岡田―同。

263 若力死の鶴上下で料るなり

室山―「若力死」は「鶴は千年（の齢をたもつ）」から見ての語で、△鶴の進献▽を詠んだ句であろう。毎月十二月、將軍より禁裡へ納められる。したがってそれを料理するのも上下に威儀を正して……となる。

一ト切れが老年程の御吸物

五〇・4

御吸ものありかたひ義をチンもい

安元・義3

青木―賛。余談になるが『時代川柳大観』大久保彦左衛門の項に、「三代將軍家光、或る時彦左をねぎらわんために、鶴の吸物を饗応した。……翌日、小松菜を多く持参して將軍に献じた。家光が之をただすと『昨日の吸物

室山 三柳・八木 敬一・西原 亮  
入江 勇・紀内 恒久・鈴木 黄  
清 博美・青木 迷朗・岡田 甫

は鶴は初め二三碗にして、残りは菜のみなれば、之も鶴かと存じ、本日持参申したり」と。

小松菜を千把ほど買ふ彦左衛門

四〇・34

其あした青菜を献じ鶴で候

四一・19

岡田―同。

264 暑いはず花嫁小袖幕を打

室山―土用干の嫁。「小袖」は袖の小さいふだん着。名称は男女とも用いる。「小袖幕」は、花見などの時、張りわたした綱に小袖をかけならべて幕の代用とするもので「これなる小袖幕の内ゆかしく」（『好色五人女』）など見える。「川柳年中行事」では、「細引に衣服を掛けたのを昔の花見の小袖幕に見立てた句案」となっている。「花嫁」だから

はじめての土用干であらう。

座敷中嫁のはびこる暑い事

二七・4

いい日和嫁は長蛇の陣をはり

安九・松2

岡田一賛。ただし礎稿の小袖、綿入であることを一言付加して頂きたい。

265 仲国か行く道すからさわく音

室山―「仲国」は彈正大弼源仲国。小督の局をたずねる場である。「嶺の嵐か松風か覚束なくは思へども駒を早めて行くほどに」(『平家物語』)、「嶺の嵐か松風かそれかあらぬか、尋ぬる人の琴の音か」(謡曲『小督』)

「さわく音」は松風であらう。

提灯におよばぬと仲国ハ出る

二六・18

松風の音トに仲国駒をとめ

五一・11

入江一賛。謡曲『小督』によるもの。折しも秋の嵯峨野を「名月に鞭をあげて、駒を早め急かん」とある。途中虫の音がすたくのである。

紀内一賛。さわぐのは「峯の嵐か松風か」であらう。

青木―同。「さわぐ音」は、松風・虫の音・

掻き鳴らす琴の音・胸の動悸等々の暗示ではなからうか。

爪音に勅使は嵯峨で駒をとめ

四三・18

岡田―「さわぐ」は虫の音ではない。虫なら駒の音で鳴き止んでしまう。やはり松風。

266 初めの姿引かへて礼参り

室山―病氣・怪我・仇討……いろいろなことが考えられる。ともかく快癒もしくは本懐とげて神仏へのお礼参り。「初めの姿引かへて」は何かの文句取のような気がするがはっきりしない。

八木―病氣平癒と考えていました。

紀内一賛。但「姿引きかえて」であるから、願の叶った事が姿で一目瞭然なのである。したがって、

受け出された女郎の礼参り

検校になつて江の島へ礼参り

あたりを考えていました。

青木―紀内氏説のごときか。「上五」いろいろな場合が想定されて、いささか不安。動く句と言うべきか。

岡田―検校の江の島への礼参りと思つています。官金を納め終え、紫衣を着て。

267 色事の願ン弁天へ座頭かけ

室山―「弁天」は七福神の一の弁財天。この「弁天」は、座頭から検校に至るまで渴仰の弁財天とも、それを勧請した本所の一つ目弁天ともとれるが、考えようによつてはそれらにこだわらなくてもよいと思う。要は、美女と聞く弁財天へこともあらうに「色事の願」をかけたのが句のおかしみであらう。

入江―本句の「色事」は女色にあらず。検校となり「紫の法衣」を着る日の一日も早かれと願うのである。ために千両を蓄財し、官に納めねばならなかつた。

いろ事に座頭千両つかいすて

寛元・八・五

江の島へ座頭大きな願をかけ

明八・桜1

八木―入江氏説の通り。「色事」「弁天」といかにも女色めかして作句したところが「おかしみ」ではなからうか。

青木―江の島の弁財天は妙音天女ともいい音楽の守護神で、歌舞音曲に携わる者は、技芸の上達祈願をこめ、殊に盲人は熱心に信仰した。紫衣の検校になるとお礼参りをした。

岡田―入江氏ご明解。

「旅人」以後の

## 麻生路郎作品 (39)

三十八年十二月号

不朽洞句帖

俥ケネディ大統領

瓦礫も莫迦に出来ない  
光をさえぎる

一瞬 黒い霧が

地球上の眼を奪った

冷戦の分水嶺に立った

若々しい姿

南海電鉄川柳会「契約」

契約がすむが早いか飲む話

三十九年一月号

不朽洞句帖

一月一日 老婆へ感謝の言葉も出

金婚に見馴れた顔もうれしけれ

振りむけば やっぱりついて来る妻よ

夫婦別あり 影と影

南海電鉄川柳会「駐車」

喫茶店一軒ふさいで駐車する

三十九年二月号

不朽洞句帖

わが時計二つとも停止りぬ 終焉の如く

足を地につけてというが そんな地が見つからぬ

地球あわただしく揺れる淋しさ 蒼く黄色く

一本のマツチの軸となつて投げだされ

税吏を遁がれたらしい 蒼空を讚美する

北川春巢氏、移りゆく世態、引用句中より

藤吉郎も少年Aの頃ありし

八木摩太郎氏、堺の文学散歩、引用句中より

蘇鉄寺腹の切りようまで教え

宝珠院墓はこちらに御座ります

寂として明治天皇行在所

南海電鉄川柳会「タクシー」

タクシーを待たせ亭主を借りて行く

三十九年三月号

不朽洞句帖

琴爪に祖母の育ちをおもわされ

日日好日なんて 父の負けおし

A少年 父の愛人と共鳴す

鉄筋の骨組み猫も寒う見る

老人の眼の前を転がりゆく紙屑

南海電鉄川柳会「時差出勤」

マイカーが時差出勤を拾つて来

三十九年四月号

不朽洞句帖

敷かれてやるひまもなかりしに 金婚か

金婚を借家住いのまま迎え

恋の彼の女タイルバックに吸いこまれ

署の窓を濡れる灯だけの深夜にて

地下センター幻の如く人がゆく

人を待つてまんね BGをとほ云わず

七十のおおなも媚を忘れざる

パートタイム僅かに若さとりもどし

切れ風のよう二号は放れゆく

結婚せる若人に贈る (二句)

ついて来いと云い切れよ 夫なりせば

花嫁にうそ云わぬこと云わぬこと

南海電鉄川柳会「交通社」

そこまでは知らぬと云いたい交通社

## 生駒から

麻生 葎 乃

— 西尾榮あて —

本日は(五月二十九日)お忙しい中をお訪ね下さいましてありがとうございます。先だってからあなた様と薫風さん、形水さんも度々生駒へお越し下され「旅人」の普及版刊行に就いて御相談にあずかり、色々御尽力下さ

いましたおかげで、しつくりとした装幀で立派に陽の目を見ることが出来ましたのも、ひとえに皆様方のおかげと深謝いたして居ります。

刊行委員会会長中島先生の御懇切な御挨拶も頂き、また編集で御苦勞をかけた不二田一三夫様や、清記係の鬼遊様や写真係の岳人様にもひとかたならぬお世話になり、ありし日の路郎の佛を皆様にお供え頂けようになりましたので路郎もさぞ満足に思っていることでございます。

私どもも皆様のお志を深く感謝いたして居ります。また本日御恵与の金一封は身に余まる御祝意と存じましたが、別に御辞退も申し上げず、私一生の思い出にいたしたく忘れ得ぬ記念として拜受することと決意いたしました。

川柳塔社の皆様へも、よろしくお伝え下さるようお願い申し上げます。

梅雨の季節も近づきました。くれぐれもおからだ御大切に下さいますようお願い申し上げます。

(傍 島 静 馬)

水煙抄

菊沢小松園選

松江市 梅本登美也

ふところをかすめて去った青い鳥  
世を拗ねた女に似合うサン格拉斯  
別れねばならぬ女とのるリフト  
末っ子に一番母の鈴が冴え  
追いかけた母が紙幣を四つに折り  
ブロックを女世帯は高く積む

寝屋川市 柴田恵美子

孤独など母なる海の貝だから  
人間愛その曖昧に目尻さげ  
一色にならぬ真実追いつづけ  
負けん気の種火心の奥に持つ  
容赦なくゴミになる値もはじくレジ

寝屋川市 江口度

花だよりポストは南向きたがる  
ポケットの小銭がうたうのん気ぶし  
はち切れる若さ乳房は上を向く  
笑い声小さい家からころげ出る

ワンマンの怒りへのれんゆれただけ

和歌山市 西山幸

生きる日の哀しい嘘で鶴を折る  
自惚れへ媚びるゆとりのない鏡  
揺れ止まぬ振り子を抱いている無口  
坂登る疲れた靴を庇い合う  
干渉の貧しさ嗤う波がしら

柏原市 小谷葉子

一行で足りる詫び状だから楽し  
深入りをして階段を踏みはずす  
明日があるからさよならを口にする  
ひよっとことおかめで平和たもってる

今治市 園部正則

悪女にはとてもなれない低い靴  
老人の独り住いの小さいゴミ  
どの寺も由緒を聞けば有難し  
未練かな元の形のままの灰

西宮市 杉浦婦美子

鯉のぼり親が未来図泳がせる  
別れ来てまだ海鳴りの残る胸

ちぎれ雲もはや届かぬ人となり

打ち明けて所詮は他人ぬるいお茶

東大阪市 崎山美子

切り札のチャンスをねらう煙草の輪

鼻の差もリードはリードと言う自信

年金がおりた時だけおばあちゃん

次の次ぐらいでも良い恋の夢

唐津市 田口虹汀

押せば出るポット厚みのない茶室

高のぞみ捨てた瞳に鯉のぼり

健康な爪を真赤に染めて生き

疲れたら来いと大樹が呼んでいる

唐津市 岩下照沖

胃カメラで医者に心まで覗かれる

寝そべって連休見ている檻の猿

カレンダー一枚はげば夏の富士

草花を植えて駅長だけの駅

大阪市 平井露芳

交番の空巢はピストルだけ狙い

アンコールされたつもりの二度桜

天の涯あきらめ雲雀地へ降りる

倉敷市 斎藤通風

深酒を他人のせいにして帰る

朱竹画を掲げた家の置葉

春雨も濡れて行けない傘が待つ

大阪市 堀口欣一

日本画の写生電柱除けて描き

赤を着るほかに工夫のない若さ

地下街の足音命刻むかに

泉佐野市 大工静子

蝶々に素通りされたネギぼうず

手に取ればほのかに匂う落椿

松ボックリ蹴って故郷の小松原

大阪市 欄蘭

口紅を拭いて歯科医の待合室

失業保険貰ってる間は波立たず

蒲鉾の板厚くなりそう二百海里

大阪市 文川野生

正確に時計は廻る悔いる日も

七転びもうこれ以上躓けぬ

明け方の星に見られていた二人

熊本市 有働芳仙

嫁がせる話親父は坐を外し

咲かされている花もあり植木市

仕送りのきたのを家主見のがさず

大阪市 文川一念

敗け犬と悟ったような捨てぜりふ

ありがとう言えるこの日のありがたさ

翳り無く命炎やせよ揚羽蝶

鳥取県 福田保子

鳥根県 角 耕草

当確へもう先生の顔になり

家中を起こして牛の子が生まれ

帯結び女一人の城守る

鳥取県 大坪天涯

対馬市 岩崎和子

他人から見れば些細な夢でよし

拳式間近い友の笑顔がつきささり

見られてる気がして襟を立て直す

尾鷲市 渡辺伊津志

尼崎市 中谷利美

慰めの角度を変えて来る手紙

この駅も時計とまったままのスト

脇役に徹し相談室の椅子

和歌山市 松原寿子

羽咋市 三宅ろ亭

真実も嘘もテールの闇に消え

同じ趣味貴方へつなぐ鎖とも

吊橋を渡れば罪になる花火

八尾市 納史葉

和歌山市 桑原道夫

想い出に生きる女に流れ星

趣味のない人が遺したスキヤンダル

木曾路来てすべての事は山の中

鳥根県 松本文子

松原市 北野久子

悔い貯めて青葉の光まぶしすぎ

仕掛人どこかで順番狂わせた

黙してる子にコーヒーをそっと置く

いつまでも朱を好んで気が若く

春の風賢母の衣脱ぎ捨てる

金積んで遊び覚えた三の糸

豊中市 高橋古啓

生涯は只一粒の花の種

反抗は生まれたことさえ腹が立ち

何もかもマンガで見せる世となりぬ

唐津市 三浦 ひろ坊

斯かる世もその日を生きる幸はあり

さればとてカマドで炊しぐ気になれず

老境へ三猿主義の自衛策

鳥取県 加藤 茶人

理屈などいらぬお前が好きなのだ

豆腐切る手つき独身ともさらば

拳式間近酒の肴でいる平和

吹田市 藤原 世史春

満場一致のわりに拍手小さすぎ

魚一びき売るに政治のことにふれ

ことごとくに野党のような口をきき

寝屋川市 小林 鯛牙子

梅雨晴れのすててこ穿かぬ股あたり

境内でダンスするなと世間寺

新宮市 西尾 功

物価高庶民に何を喰えと言う

病室にまだいてほしい妻の笑み

鳥根県 飯塚 虎秋

床下にまだ居た亡妻の日和下駄

落書を感心してる寺男

羽島市 伊藤 静枝

パンタロン買わせる鏡よく写り  
お礼肥与える量のえこひいき

高松市 溝淵 美紀子

叱るにも逃げ道一つ開けてやり  
人生という名の写体撮せない

西宮市 山田 喜代子

夜行性又ラーメンを食べている  
草に寝てすいこまれたい空の青

須賀川市 平栗 金太郎

二度目から恥しがらぬモデル台  
吠いる犬唸る犬には寄りつけず

尼崎市 大垣 たもつ

回覧も削ってくれと寡婦の家  
父とゆく葬いさえも嬉しがり

寝屋川市 福富 隆子

血の色も変るか苺を食べる宵  
税金が還るニュースも無関係

橿原市 西本 保夫

御苦労さんだけで平社員かたづけ  
定年と言うオアシスは水が枯れ

東予市 小山 悠泉

からくりが少し分った年の功  
父の背を越して行く子に明日がある

羽曳野市 岩橋 双虎

うちあけて雲の拡がる空を見る

まんまるな余生をねがう煙草の輪

八戸市 島田 昭治

反抗期俺の昔をフト思い

あっさりとして下文と片づけられ

岡山県 長尾 保

やりくりの智慧を煮めている料理

営業用の父の笑顔を見て戻り

羽曳野市 麻野 幽玄

先頭になるのはゴール前でよし

サンガラス別な私にしてくれず

岡山市 井上 柳五郎

有名校学帽しかと高校生

すんなりの決議反骨物足らず

宝塚市 吉田 笑女

灰皿へくすぶる客の捨てりふ

味噌汁へ浮かせるネギも鉢作り

松江市 本庄 快哉

おごそかな流れるテープにしておこう

うっかりと下着売場に妻と出た

岡山県 池田 半仙

CMの手頃暮しとかけ離れ

肩書の取れた老後を軽うみる

今治市 薦本 昌道

愛妻が荷物になった気の迷い

一対一になれば異性の距離となり

大臣へノーネクタイだけ賛成し  
定年の土産に長と言う名刺

新潟県 高野 不二  
大阪市 新川 貞祐

風鈴もなりをひそめている暑さ  
羨やまし何でも美味しいと喰える人

滋賀県 柚木 踏草

判断の余地おみくじの裏は白  
腐われの籠へ光輪描くほたる

島根県 岩田 三和

青い鳥白いお手ては大嫌い  
一大事自然無視して出世した

尼崎市 駒村 岳麓

腕も有り脛も噛じらぬ子に習う  
はずむ心鮎が呼出す深夜立ち

青森県 波 ただお

コマーシャルこの頃方言幅きかせ  
八重桜子の成長と共に伸び

三重県 川上 富子

飲みに行く靴なら磨くのを止める  
悲しい日もやっぱり紅を引いて待つ

竹原市 大島 花炎

千羽鶴窓へ羽ばたく風を入れ  
ふしくれの掌が握りおこす土の詩

鳥取市 有田 鹿の子

動揺をかくせぬ日記の字の乱れ  
寝ころんで春の匂いをたしかめる

唐津市 田中紫浪

観賞の眼がこの枝も邪魔と言う  
ライターにまでじらされる待ちぼうけ

唐津市 桑原掬治

公認の彼女を送って星と会い  
都の友思ったよりもやぼったし

唐津市 岩崎実

ここだけの話ついつい口ぐせに  
合格す甘酢の匂い厨より

唐津市 松垣岩光

花嫁の涙をレンズ見てしまい  
カーフェリー出るたびクラゲけとばされ

米子市 佐伯越子

落葉かく尼僧にきびしい影を見る  
嫁入りの荷の重さは苦にならず

大和郡山市 今谷紫園

早う来て散りゆく花を見てほしい  
先生の批判しいしい始業式

岡山市 砂田静佳

普段着で再会どちらも未亡人  
父と娘と書いても宿帳無表情

鳥取県 広富白峰

反骨が自慢で貧乏脱け切れず

あの時の誤差いつまでも付きまとい

大阪市 松原利代

電話代上がって故郷遠くなり

支払いを済ませてくぐるな温暖簾

下松市 徳光秋人

自前の歯抜かれ恍惚へ暮ら

鳥取市 岸本無人

三面鏡時間のかかる顔が買い

八戸市 紅葉山

どうしても妻の好みを着せられる

橋本市 岩倉天彦

笑わせて猥談うまく切りあげる

大阪市 野田君枝

ファインプレー裏を返せば命とり

青森県 荒田つる

旅先のムードに弱い倦怠期

大阪市 北勝美

生噛じりどれも手がけて伸びなやみ

山口県 高橋雀声

掃除機においたてられて家を出る

富田林市 中村優

二カ月先の句箋へ季語を選ぶ

出雲市 高見鐘堂

人生に迷うてはたと立ちどまり  
岸和田市 池田香珠夫

また上がる手締めの音の植木市

姫路市 大原 葉香

象牙印値ぶみもさせてついでやり

出雲市 板垣 夢醉

放漫ときめつけられた店じまい

松江市 岡崎 雪美

人の世は人それぞれの過去背負い

亀岡市 森 和堂

昨日温泉に今日は浄土へ謎の旅

東大阪市 加藤 千代子

雨上りきれいな内に蓬摘む

大和高田市 岸本 豊平次

真ッ白に書いては雪の画にならず

豊中市 田中 善四郎

念願を信じて今日を疑がわず

尼崎市 中塚 喜甲

魔女の鏡に善人の顔つくる

唐津市 山下 勝一

春斗が済めば物価が待っている

唐津市 筒井 朴竜

真心の籠もる出荷に値も上がり

松江市 黒目 大鳥

大いなる喜び米の粒揃う

豊中市 出口 セツ子

定年の男は長き影をひく

郵便のバイクの音がまた逃げる

鳥根県 安達 潮音

旅好きな聖徳太子家に居す

☆

岡山市 清水 金太郎

スト妥結今日はわたしの誕生日

母親についてわたしは卑怯者

土壇場で女ごころの銅羅を打つ

女性に囲まれ青年の口重くなる

名古屋市 鈴木 可香  
(四月二十日)

おとなしい児は姿見へ母の真似

出勤へ一日もたすボタンつけ

かたりことりどうやら酒の出る気配

おしゃべりの耳傾けるものがない

大洲市 米沢 暁明

指人形いくさは知らぬ子の十指

天に恥じず等と拍手もなき自賛

ぶっきらな父に言い足す母が好き

二番手のずるさに運は付いて来ず

岐阜市 市川 鱗魚

酒が火をつけて自分でない自分

迂闊にも裏があるとは知らぬ酒

調法な酒とも思う生返事

醸えず叛旗の咽喉に噎せる酒

東京都 池口 吞歩

秀句鑑賞

前月号から

水粉千翁

川柳も含めて最近、「原点へ帰れ」という声をよく聞く。結構なことである。

機械文明という現実性は、人間が物を作った、それを働かせる知恵である。そして、そこから出てくる公害というものに氣息奄々である。皮肉なことである。だからと云ってこれも原点へ帰れなどは到底いえることではない。

それは人間の心が原点へ帰れということである。それほど人心は荒廃しているのかと思うが、たしかにその場面に日々刻々めぐり会うことが沢山あるようである。

共に川柳もその原点の心に帰れということである。それは前衛的難解句の氾濫に対する警告とも聞こえるが、一面、これでは川柳の将来が困るといふ自覚かも知れない。

川柳の心の一つに私は「間口の無い川柳を作れ」ということを発見したのである。そんなことは知っているよという人もあるかも知

れないが私は最近それがだんだん判りかけているのである。

川柳の間口は「叙法」である。といつてもその叙法はどうでもよいということではないことは勿論である。

そして川柳は奥行の長短によって作品の優劣が決まることはいう迄もない。

云うは易く、創ることの難かしさを人一倍痛感している私のひとりごとである。

信じたい風を待ってる曲り角

大林曲ん手

現実と未来の接点が曲り角である。しかし未来を信ずるところに生甲斐がある。そんな鑑賞をしたのである。

菜の花のため息を聞くおほる月

田中紀美代

千翁好みの句だという囁やきが聞こえる。でも再読してごらんさない。いいですよ。

隣人を信じ都合でかける鍵

森脇 善彦

類想句は沢山出ているが、都合でかける。の叙法がうまく穿っている。

揺れている心みつめる終電車

西山 幸

小さなドラマと心のうごきが感じられる。

立札をたてて花芯をいとおしみ

梅本登美也

きれいな川柳の心がキャッチされている。

言わずともお茶の出でくる妻でよし

溝淵美紀子

お茶の句をよく作るがこの句には負ける。

広告の余白へ母の読めぬメモ

石井さわ子

小さくして敏感な女の客観がうまい。

日めくりは命を刻む音を秘め

飯塚 虎秋

この場合「音のない音」がすばらしいと思う。

つまずいたところにも酒の販売機

平井 露芳

男の句に間違いない。明日を捨てない男だ。このように鑑賞すると、前文の奥行の句は最初の三句に絞られるようで、その他は間口のありすぎるような句のようである。

私の鑑賞眼の狂いかな。

その他に目についた句で、もう一步何んとかならないものかと惜しまれる句を並べて見る。

南風今日は菜種に問いかける

笑い声小さな家からこぼれる

良い寝顔小さな罪は捨ててやり

山門をくぐれば坊さん洗車中

カラコ口と旅路の夜は下駄ニツ

案じるな息子のでかい足を見よ

# 愛染帖

## 橘高薫風選

富田林市 岩田 美代

またひとつ憎しみ消えてすしを巻く  
母の日は茶房の隅で若くいる  
約束を忘れた耳が立ってくる

八尾市 大路 美幸

はなやかな男の棺も木でつくる  
食欲が進むと悪を考える  
月光に洗われている千の鬼

島根県 榊原 秀子

あたたかい便りは鈴を振る音で  
許しがたきものすぎずきと戦友忌  
風光る金魚の腹もよく光り

今治市 月原 宵明

花吹雪仁王ますます憤り  
老兵としていつまでも袖カパー  
ひたすらに焦れた春にストが待ち

青森市 工藤 甲吉

地の果ての果てへ別れた人は去に  
官高民低は頭も年金も

カーネーションの微笑少女が買いに来て

堺市 高橋千万里

莓狩り女真つ赤なマニキュア

柏原市 小谷 葉子

投げられた石を温めて敷きつめる  
真実を明かさぬ紫陽花の憎し

大阪市 西出 一栄

親切な風に猫背を押されて来  
人生観ふと冥想にとりつかれ

兵庫県 遠山 可住

虹をほだいてセーターに編んでみる  
ハイヒールわたしも大人の足音か

倉敷市 小野 克枝

積木よりかすかな音の夫婦にて  
生返事女の可愛さが消えた

大阪市 小出 智子

山の絵を買ってやさしくなつてゆく  
雑念の雲がずしりと動かない

八尾市 宮西 弥生

ひよつとこ面かぶつて家族乱れてず  
押し花を集める女にある絆

神戸市 野口 律子

飲み干せばグラスにもう一人の私  
読み耽る夜の道化はあらわれず

神戸市 岩下 美樹

洗い髪しばらく耳を留守にする  
バラの香はひたすら妻のためにある

神戸市 来住タカ子

母の胸ずたずたにして子の泪  
花芽出て花の友より来るたより

倉敷市 水粉 千翁

うつぶんの波紋とならず石沈む

かな文字のころおうらみ申し上げ

香川県 田井 教之

また裏目野の花白く咲いている  
自分宛の手紙を書いて老いひとり

唐津市 岩下 照沖

つくつくし見つけ貧しい幸思う  
海女昼寝鮑は桶のふちを這う

岡山市 時末 一灯

その人が居れば昔のままの家  
雑沓で破調の靴音が迫る

大阪市 神夏磯道子

幸せが続き臆病になつている  
ワマンの汗ハンカチが真つ白

伊丹市 樫谷 漫柳

失つた彩に未練はない白鳥  
善人は花を愛する真似をする

寝屋川市 宮尾あいき

毎日が母の日である有難さ  
こんな母にもカーネーションが届き

東大阪市 加藤千代子

知つて乗る嫁の煽てに喜んで  
平等に孫も見てやと子が三人

大和郡山市 今谷 紫園

此処ならと通天閣で手をつなぎ  
陽の暮れたところが宿の愛車行

京都市 山本規不風

他都市から隣のビルを建てに来る  
女から水に流すと云う電話

大阪市 河野 君子

煽つても老父の炎の曲りぐせ

和歌山市 西山 幸  
裏側をうつす鏡も持っている

香川県 三井 酔夢  
仏にも鬼にもなれぬ老母たち

八尾市 高橋 夕花  
聖堂で藍より青き人に会う

倉敷市 小幡 里風  
メーデーの妻陣痛に耐えている

和歌山市 若宮 武雄  
踏切事故破壊テストかも知れぬ

唐津市 田口 虹汀  
疲れたら来いと大樹が呼んでいる

神戸市 宇佐美和子  
逢えば崩れるひこうき雲を見よう

岸和田市 池田香珠夫  
クレーンが斜塔のように立つ港

大阪市 新川 貞祐  
核家族回向頼まぬ墓詣り

岡山市 清水金太郎  
乗り場まで別々に行く老夫婦

鳥取県 清水 一保  
春闘のファイトを我が家でほしがられ

竹原市 三宅 不朽  
金槌のふとつまずきし風の音

藤井寺市 西 いわを  
三回忌すましわたしのドック入り

鳥取市 河村 日満  
末席に坐って貝となる余生

和歌山市 野村太茂津  
ネクタイが一本漂泊の旅靴

和歌山市 小川佐知子  
こんな時逢いたい人がいてくれる

和歌山市 松原 寿子  
海の色ブルーが胸を越して来る

東京都 山根 白星  
ゾリンゲン握り仮定の殺意かな

鳥根県 小砂 白汀  
生きているなどとは見せぬ水平線

鳥根県 錦織 文字  
春闘へうちの時計はストをせず

山口県 高崎 雀声  
タレントも議員となつてみさげられ

岡山県 出原 敬一  
事酒になれば異存のあろうなど

倉敷市 藤原 健二  
鬼の棲む家と表札書いてなし

守口市 羽原 静歩  
美しい寝顔へ玩具のレール敷く

豊中市 戸田 古方  
礼云いにきながら礼をいひそびれ

岡山県 長尾 保  
露わらび笛庶民に満ちた春

大阪市 欄 蘭  
口車乗って話の種にされ

松江市 柳楽 鶴丸  
官僚のタマゴ割れたら使えない

岡山県 直原七面山  
ひまわりのように女に顔を向け

尼崎市 黒川 紫香  
樹林みな眠って人の息怖く

生駒市 草深 酔升  
春闘の列で腕組み古稀近く

柏原市 大峠 可動  
嘘いくつ吐いたら仮面替えようか

寝屋川市 江口 度  
かたつむり追ひ抜くスリル知ってるか

富田林市 和田維久子  
百の石段に信心の空がある

平田市 久家代仕男  
哀調は己にしかと三の糸

今治市 萬本 昌道  
順応の生活になれて真珠婚

貝塚市 野坂つき子  
くしゃくしゃの万円札が不平言う

滋賀県 柚木 踏草  
すり鉢の底に姑嫁の中和剤

尾鷲市 渡辺伊津志  
自惚れをたしなめられた見舞状

岡山市 船越 汽水  
残業費つかない管理職帰宅

唐津市 山下 勝一  
鯉のぼり天下取る子もいるならん

唐津市 桑原 掬治  
貝殻よかつてはお前も生きていた

東大阪市 竹中 綾女  
涎掛けで顔の見えない辻地蔵

倉吉市 奥谷 弘朗  
子等の下駄無事に脱がれていて安堵

和歌山市 津田 与史  
信用されぬ達磨は倒れたまま起きず

大和郡山市 森田カズエ  
職安へ新車で着いた若い人

諫早市 原田 明春  
拒否権をもたぬホテルの自動ドア

羽曳野市 麻野 幽玄  
完全看護冷めたスープを流し込み

羽曳野市 岩橋 双虎  
春はもう終いですよと濃い緑

八戸市 紅 葉山  
それもよし貧乏が僕に惚れたなら

宝塚市 吉田 笑女  
おみおつけ美味しい今朝は五月晴

大田市 高橋 寸二  
落花しきり花はあざむき通せない

東広島市 高橋 鬼焼  
小走りの母をきずかうビルの街

米子市 佐伯 越子  
風流には遠く休日録をふり

豊中市 出口セツ子  
新たなる悲しみ君のつけし癖

新宮市 大矢 十郎  
銭分けて妻と別れる湯の名所

大阪市 那須 鎮彦  
芽ぶく時山はやさしい香を放つ

大田市 藤田軒太楼  
騙されてみるかと誘いに乗ってやり

倉吉市 今村 夕路  
喜寿過ぎて死をいつでもと自覚する

堺市 伏見 茂美  
心の傷腑分けの様に取れぬかな

今治市 越智 一水  
物心一如の世界にさせる茶一服

枚方市 宮川 珠笑  
豊艶な肌がこぼれる更衣

大阪市 江城 修史  
愛不信合わず歩巾にある打算

唐津市 三浦ひろ坊  
肝臓を直すくすり胃をやられ

羽咋市 三宅 ろ亭  
せめてもの抵抗カリカチュアが好き

唐津市 岩崎 実  
買物に付け足し買いの妻戻る

和歌山市 沢山 福水  
整形の鼻には似ない子が生れ

東大阪市 竹中 肖二  
しぼるだけしぼりホステス蒸発し

今治市 園部 正則  
ボール拾い新入りに陽が長すぎる

岡山県 池田 半仙  
風止むと一斉サボタージュ鯉織

大阪市 北 勝美  
柿の花珍らしそうに孫ひろい

富田林市 中村 優  
赤富士に負けず劣らず児らは塗る

松江市 梅本登美也  
姉妹がひそかにおんなじ人を恋い

和泉市 西岡 洛醉  
老いの一徹肩怒らしたただけの事

鳥取県 広富 白峰  
悪心がドクロを巻いて丸う見せ

八戸市 小泉 紫峰  
番犬が吠える矢印の行き止り

唐津市 田中 紫浪  
初節句大人ばかりの祝鯛

唐津市 新岡回天子  
どろんこの池は出来たがママの顔

豊嵐川市 小林鯛牙子  
こだわりへ小高い数の花いばら

大阪市 文川 一念  
溜息は何とも悲しきげ声

唐津市 松垣 岩光  
新課長の音痴に合わせ手を叩き

鳥根県 岩田 三和  
もち肌の大根買ったら辛かった

岡山市 井上柳五郎  
新しいランドセルあすの苦菜負い

東予市 小山 悠泉  
左遷にも慣れ満点の住み心地

鳥根県 飯塚 虎秋  
花に降る花の雫は花の色

倉敷市 斉藤 通風  
白壁で拭い切れない自己嫌悪

〔評〕投句者が増え、精一杯とることにしたが、まだ二十数名の全没者が出た。評はお互いの勉強になるので必要だけれど、没の多くなるのも忍び難い。西出一栄、宮尾あいき加藤千代子の皆さんのように自分の身辺を詠まれた作品に好感を持った。

# 川柳

## しあわせの詩

### 戸田古方

路郎先生のおっしゃる「生命ある句」とは人を幸せにする句だと思っています。なぜそうなるかということ、かつての本社句会の兼題、満開、強情、身綺麗、放談の四つの言葉をつこうと三題嘶風にしてみました。

先ず、満開。勿論桜、私らしく、親鸞が得度を急がせた次の歌を思い出します。

あすありと思う心のあだ桜夜半に風の吹かぬものかは

一昨年七月、高鷲亜鈍さんのお招きを受けて寝屋川の三井ヶ丘句会へ参上、「親鸞と川柳」というご注文の題で話をさせて頂きました。突拍子もなさそうなもの同志ですが、私は客観性ということを接点として、この二つ

を結びつけました。主観に溺れていては冷静な批判はできません。秀れた句も生れないでしょう。その窮極は厳しい自己批判にさえ入ってゆくのが川柳です。親鸞における倅せへの第一歩は、鋭く自己を見つめること、自分の醜い正体を、余すところなく、勇気をもって、胡麻化さずに擲むことです。親鸞は自らを極重悪人といい、「地獄は一定すみかぞかし」と懺悔しているのです。

次は、強情。古今東西を通じて、親鸞ほど強情な人はいなかったように思います。何が強情かって、親鸞は自分に対して鶉の毛ほどの妥協も許さず、責めて、責めて、責め通したという点です。それならこそ確信を以て、悪人正機、「善人なおもて往生すいわんや悪人おや」と喝破していますし、弟子一人ももたずとの同朋精神も産み出しました。また、父母の孝養のための念仏はしなかったともいっています。勿論、絶対の信仰から迸り出たものとはいいながら、どれもこれも、常識からはみ出した言葉ばかりで、そんな言葉が吐けたのも、この強情のせいではなかったかと思えるのです。そこから、極めてユニークな

形で、釈迦の教えをわれわれに喰べ易いように調理することができたのでした。とっつき易い教えが生れたのです。

釈迦の教えの中に、大切なもの一つとして、身口意の一致ということがあります。身は行動、口は言葉、そし意は心です。行動は正せたように見せかけもできます。言葉も、「口先き」というように上手に使えます。だが、心は何を考えているか、いちいち見せる訳けにはいけません。全く、俗世間とは正反対に、身より口を、口より意を大切にせねばならぬと真面目に取組んだ時、どんなに鼻真目にみても、私を善なるものと自惚れきれないのです。親鸞の深い喜びはここから出発しているのです。そうです。こんな私が文句をいいながらも毎日無事息災に生きていることを思うと、私は守られている、私は生きているのではなくて、生かされていると喜びすにはいられない。偉大なるウターンです。すべし、すべからずの教による努力でなく、本当に行詰らない、伸び伸びとした精進が誠にスムーズに、自然に流れ出してくるので、これを無我の境というのでしょうか。

さて次が身綺麗。誰しも身綺麗を望みます。ことに女性は美人になりましたが、三十四年間、女生徒と付合つて来まして、それはっきりわかります。私は生徒達によくこの身口意の一致の話をしてきました。身口意の一致こそ、真に美人になるための道だ、とです。身の美しさには時間や金を惜しまず、浮身を細らせても思っています。又、言葉についても、近頃乱れたといつても、やはり、やさしい女らしい言葉へも逆いはしていません。だが、一体、何人が心のオシャレを考えているでしょうか。ブスといつたら叱られるかもしれないが、「大地」の著者パールバックにしろ、日本の女流作家、「二十四の瞳」の壺井栄や「地の果まで」の吉屋信子にしろ所謂、美人ではないのですが、その奥に秘む湧いてくるような美しさを誰も否定しないでしよう。それもこれも無我の美ではないかと私は思うのです。

真善美を求め続けて、聖の世界へ一步を踏み入れようとする意欲がこれをもたらしたに違いありません。

最後は、放談。放談とは一応、勝手に喋り

まくるといふことにしておきましょう。自由に喋べることです。それでいて、人を魅きつけるものでなければなりません。自由を好まぬ人はありません。私は、いつも、自由というときは勝手気儘の振舞から考えることにしています。だが自分だけに限つても、勝手気儘は、時には、健康を損ね、自らを亡しかねません。ましてや社会生活をしている以上、真の利、不利を見極め、適当にブレーキをかけ、その限度内においての自由が考えられるようになつてこそです。そうでなければ、自由は不自由になりかねませんから。孔子は十五で学を志し、五十五年間修養を重ねて、七十にして、己の欲する処に従つて則をこえず、と申しております。五十五年といえは、大変な努力ですが、やっと本当の自由を得たといつては、七十年という齡になつた私から見ますと、ひよつとすると、何をする情熱も氣力を失つてしまつたのではないかと、ヘラズ口が叩きたくなつたりします。

人に聞かせて、聞いてもらへる本當の放談のできるの、人間のできた人でなければなりません。つまり、路郎先生のおっしゃる人

間の陶冶された人ということになります。

川柳する人、真剣に作句と取組んで精進を続けられている人々は、その間に、いつの間にか、五十五年もかからず、この人間らしい人間に育つていかれるものと信じます。その人々の作る句の中から、当然「生命ある句」が吐かれ、残され、自らの幸せはもとより、一遇を照らすといわれる通り、一人が十人を、さらに百人を、千人を、万人を、億人を浄め、幸せに近づいていくのを疑うわけにはまいりません。古方はもう若くはありません。が、これが、燃えつきそうになつた古方に残る消えることのない唯一一つの夢です。

## 路郎物語を読んで

― 秘かにおもうこと ―

### 菊沢小松園

嘗ての人も知る熱血漢であり、激情家であつた麻生路郎先生の御様子は、川柳雑誌創立

前後の有様やその経営の辛苦は川柳塔の路郎物語に依る東野大八先生の健筆に面目躍如とはつきり映影を再録されて、懐しくもまた毎月興味深く読まれた。殊に我々先生の薫陶を受けて、その後塵を拝する立場にある者に取っては事更に感慨の深いものがあつた。

路郎物語が完語するとはっかり誌上に穴があいた心持にさせられるのでは無いかと今から案じられる。

併しながら此の物語の大半の資料が故福田山雨楼氏に依つて残されたものに拠られ、それを素材に原稿にせられたと承っている。山雨楼氏は人も知る路郎家の心からの帰依者であり、子飼の内弟子的存在で、路郎一辺倒の人であつた。

当時の川柳界の路郎を視る忌憚のない眼や批判めいた挿話等に対しての路郎物語はより美しいものへの涙過と受止め方の美化に依る事実との距離を感じられた方々も多くあることと思う。

そうした初めから路郎先生に対してある種の固定した観念を抱いてこの長い路郎物語を読んだ人々は、あの事実、この事実がいつ何

んな形で現わされるのかと悪賢しくも興味深く待っていたが、終に其の麗筆の前にそんなことは幻影すらも現われなかつたことに、ほつともし安心もした。そして伝記もの多くのうに思えないことは無いと私は思っている。

## 小僧、大きく

## なつたナ

黒川紫香

私が四十年間阪急電鉄に在職中未だに忘れることが出来ない言葉に

「小僧、大きになつたな」

という一語があります。この言葉の中に含まれている情愛と励ましは私でなければ味わうことが出来ない深い意味があつたのです。

戦後もようやく落ちつきを取り戻した昭和二十五、六年頃だつたと思います。所用があつて三階の社長室の前を通りかかつた折、バ

ツタリ出合頭にお会いしたのは公職追放を解除されたばかりの小林一三さんでした。私は思わずハツとして、身動きもせず立ち止まりました。

小林さんといえば戦前の人なら知つておられる阪急電鉄の創始者であり元社長でもあり戦時中には近衛内閣で商工大臣まで務められた大物ですし、我々阪急社員にとつては神様みたいに雲の上の人でしたから私が言葉もなく立ち止まつたのも無理はありません。

その小林さんがつかつか寄られるなり

「小僧、大きになつたな」

といつてそのまま後を見ずに秘書と共に去つて行かれました。しばらく呆然と見送つていた私がハツと今小林さんのいわれた言葉の意味がどんなに深いか判つて来たのです。

この言葉にある「小僧」は目下に対する親しみがあつた「大きになつたな」には人間的に成長したなという励ましの意味が含まれていたのです。ご承知のように私は川雑時代から潮花君と共に小さい方の双壁でしたから決して体が大きくなつたとはいわれません。当時よくやく係長になつた私を小林さんが知つてお

られたものと思われず。

これには私が阪急に入社した当時のことをお話ししないと一つ意味が判らないと思いません。

大正十一年というところの関東大震災のあった二年前の八月一日、出社通知の葉書を持って阪急本社にきました。当時阪急は神戸線を開通させて社名も箕面有馬電気軌道から阪神急行電鉄に変わって間もない頃です。まだ梅田駅前には人力車がずらり並んでいて阪急電車というより、みのお電車と呼ぶ方が親しまれている時代です。その東端に五階建の小さなビルがあり、一階が白木屋マーケット、二階が食堂、三階以上が阪急本社事務所になっており、一階に白木屋がある関係で事務所入口は東端に小さな所で階段があった。殺風景な入口で人気がなく私がウロウロしていると後から中年を過ぎた背の低い人が来て

「君、君、何か用かね」

と問われたのでハガキを見せると

「君、それを持って来給え」

といわれるので見ると目の前に大きな郵便受があり郵便が一ぱい溜っていた。それを持

って三階迄ノコノコついて行くと扉があって中へ這入ると室内はカウンターを挟んで通路その両側に机が並んでいて、その人が這入って行かれると中の社員達は一斉に起立して頭を下げています。この人は偉い人だったんだなと思いつらついて行くと一番奥の庶務課と掲げた所で一人の社員を呼んで

「会いに来ているよ」

といてそのまま奥の部屋に消えて行かれました。私は課長と係長に面接してその場で入社決定、即日勤務と今では想像も出来ない幸運で阪急に拾われました。後で判ったのですが先程案内してもらった人が小林一三さんでした。この時は専務さんでしたが社長は常駐でなく小林さんが事実上代表者でした。

早速与えられた仕事が給仕、給仕といっても専務室に一人、重役である技師長室に一人合計二人それも皆重役付きですから普通の給仕とは一寸違っていました。まだ秘書という役はなく大体の仕事は庶務課がやっています。でもこの仕事を一年余務めさせて貰ったお蔭で偉人といわれる小林さんの身近で入社早々過ごせたことは本当に倖せでした。

その後、私は土木を勉強して土木課へ。小林さんは社長、東電社長、戦時中には前にも触れたように近衛内閣の商工大臣、戦後戦災復興院総裁から公職追放そして解除、とても程遠い人でした。それが偶然約三十年後にお逢いして私が絶句したのも無理ない事です。再び想い起こします。

「小僧、大きくなったな」

たった一言であるこの言葉が私にとってもどんなに大きな親しさとお励ましの言葉であったことでしょう。そして三十年もお逢いしていない下級社員を覚えてもらったという感激は終生忘れ得ない一言だったのです。

小林一三さんといえば阪急の創始者というだけでなく、宝塚温泉を歌劇の町にし、沿線に住宅を建てて人を呼び、ターミナルにデパートを作ったのも小林さんの創案です。箕面電車として発足した宣伝文に、「景色のよい空気の旨い所を走るガラ空きの電車」というとてつもない唄い文句を出されたのも小林さんです。事業経営だけでなく文学の趣味も深く、歌劇の脚本はもとより漢詩、俳句、和歌等もたしなまれ、蝶佐、逸山、逸翁と年代に

添って号も変わっていました。

世に知られている逸話は多いと思いますが私が身近にお仕えて得た二、三の話をつけ加えます。

小林さんは手紙を大切にせられていて、公用以外は自分でそれも毛筆で書かれています。たまたまその手紙に切手を貼っていた私に歪めて貼った切手を指して

「手紙というものは心を向うに伝えるものだから例え封筒でも大切に扱わなければいけない」

とたしなまれ、逆に社内の人に出す場合は古い封筒を裏返しにして使われていました。

また非常な清潔好きで整理整頓を口癖のようにいわれ或る時、何かの所用で社員より早く出社された折、社員の机の中を見て廻り、一番よく整理された机のSという社員に即日当時で破格とも思われる海外視察という褒賞を与えられる等賞罰には徹底されていた。

またこんなこともあります。当時の電話は手廻し信号式で特に私の近くにある電話は壁掛け式のもので、背の低い私が苦勞してかけているのを見られて

「踏み台でも作ってやれよ」

と係の人に命ぜられ、怖い小林さんとは思われない優しい面が伺われました。憶い出せば逸話と教えていただくことが多かった小林一三さんでした。

(四月本社句会の柳話から)

## 弘朗句碑除幕式

### 石垣花子

新緑のさわやかな大山で弘朗先生の句碑の除幕式がありました。(四月二十九日)

大山に詩情を添えて句碑が建ち 越子

当日は朝がたの雨もすっきり上り、北壁もその雄姿を見せ初め愈々除幕の時刻には陽顔もにこやかに笑み初め、満開の遅咲きの桜もしお風情を添え、大山の目抜き通り近くの一角に神官の声が朗々と風にのれば自分の事のように身内が引締る思いでした。

立つ耳に野鳥の声も今日は一しお繁く聞えました。

大山に野鳥のコーラス聞くも春 瑞枝

先生の御孫様御二人の可愛い手で除幕の綱を引けば、大山にふさわしい自然石に「北壁の男らしさを見て飽かず」の句もくつきりと浮かび、

丸いほほ染めて除幕の孫二人 花子

各柳社代表者の捧げる玉串も無事終れば参会の柳友も感激の面持で拍手を惜まず、あらためて句碑を眺める人、句碑をバックに記念写真を撮る人、句碑の前はしばらく交歓会の如く和やかな場になりました。

見て飽かぬ句碑大山を負うて立ち 千代

大事業を成し遂げられました弘朗先生や、奥様の内助、地元の柳友の方々の御協力も又大変な事であったろうと思われました。四季を通じて登山者の多い大山で北壁に語りかけながら柳友との再会を待ちわびているであろう句碑へ、機会のある度に訪ねて見たいものと思ひながら柳会の席へと向いました。

(きやら木川柳会代表)









大 萬 川 柳

「 疊 」 入 選 発 表

選 者 川 村 好 郎  
投 句 総 数 五 百 五 十 句  
入 選 六 十 七 句

湯上りのビールがうまい青畳

神 戸 牧 人

大阪 あいき  
一日の疲れ吸いとる青畳

退院のよるこび畳の匂い嗅ぐ

富 田 林 優

和歌山 としよ  
新畳亭主は何か云いたそう

半畳をふさぐ座席を譲り合い

羽 曳 野 幽 玄

倉 古 弘 朗  
せめてもの老いの奢りの青畳

畳拭く妻で不信を寄せつけず

貝 塚 つき子

和歌山 武 雄  
三代の涙を吸うた古畳

玄関の畳に暮しの見栄があり

和 歌 山 幸

八 尾 幸 生  
空しさと畳の広さ寡婦の夜

ジーンズの足つけている畳の間

岡 山 静 佳

大 阪 真 砂  
表替えしたいが酒もやめられず

石畳踏むといくさの音がする

富 田 林 花 梢

宝 塚 静 馬  
畳の上で死ぬ欲だけは捨てずいる

お茶の間の畳暮しの愚痴を聞く

大 阪 誓 二

大 阪 君 子  
叱言聞く足を畳がしびれさせ

やっと畳替えたに転任辞令来る

藤 井 寺 吸 江

八 尾 美 幸  
畳の夢見つづけ散った畳もある

跡取りの嫁待つ部屋の新畳

鳥 取 天 人

大 田 軒 太 楼  
半畳を入れてムードを和らげる

色褪せた畳は過去を喋らない

和 歌 山 ち や

湯の町の旅情畳の部屋がよし

八 尾 鬼 遊

大腿で畳もあるくパンタロン

大 阪 満 津 子

肩書きをはずして我が家の青畳

大 阪 ま す え

四畳半女の涙が溜ってる

大 阪 一 休

取り替えた畳の匂いで日々新

枚 方 弘

対局の畳無心に青光る

鳥 取 豊 生

ひと部屋は畳が欲しい青写真

橋 本 木 魚

畳にも少し飲ませたこぼれ酒

大 洲 暁 明

古畳聞けば答える私小説

大 阪 天 笑

怪獣と積木に畳音を上げる

堺 美 子

ある時の畳土足で踏み込まれ

東 大 阪 天 笑

ローンでも木の香畳の香がうれし

鳥 取 露 杖

小言聞く膝へ畳の無表情

東 大 阪 露 杖

半畳が入って熱弁立往生  
駒下駄が朝を奏でる石畳

鳥 取 露 杖

赤茶けた畳になじむわが暮し

松 原 重 人

お茶席の足の痛みを知る畳

八 尾 夕 花

悴せはこの新妻と青畳

西 宮 多 久 志

民宿の畳譏の香も添えてくれ

大 阪 ふ み

高魂は呉服売場を畳敷く

大 阪 ふ み

親孝行一つふやした畳の間

大 阪 ふ み

百畳の末席妓の手届きかね

倉 敷 里 風

今年こそいい事ずくめの畳替え

神 戸 と ん た く

古くともやっぱり畳と長火鉢

大 阪 頂 留 子

大の字に畳へ寝たい羽田着

大 阪 頂 留 子

大の字になって故郷の青畳

大 阪 頂 留 子

脈ありとセールス畳みかけてゆく

大 阪 頂 留 子

老婆と新茶を囲む青畳

大 阪 頂 留 子

冷やかな寺の畳の無表情

大 阪 頂 留 子

遠い恋畳の染みが覚えてた  
畳屋のプライド秘める肘のたこ

和 歌 山 英 子

こらえれば使えるものよ古畳  
大洲 曉 明  
無理をいう男の好きな四畳半  
妻の眼に夫も同じ古畳

飲んで騒いで覺焦がしてみな帰り  
塀 祐 天 笑  
忍従の額覺が知っている

すり切れた畳に暮しの詩がある  
今 治 宵 明  
鳥 取 静 泉  
一疊で足る人生に逆らわず

道場の覺敗者を笑わない  
人ノ句  
鳥 取 静 泉  
昭和五十二年度

地の句 鳥 取 静 泉  
テーブルで争い疊で握手する  
今 治 宵 明

天の句 富田林 花 梢  
虫を聞く歩巾となって石畳

客間だけ疊を新にするゆとり  
選 者 吟  
富田林 花 梢

一 天 笑  
二 花 梢  
一七、五 富田林

三 憲 裕  
四 好 一  
五 幸 玄  
六 幽 花  
七 夕 幸  
八 美 砂  
九 真 幸  
一〇 美 子  
一一 一本杉  
一二 静 泉  
一三 幸 生  
一四 重 人  
一五 惠美子  
一六 可 住

一四、〇 塀  
一三、〇 大阪  
一一、〇 和歌山  
一一、〇 羽曳野  
一〇、〇 八尾  
一〇、〇 大阪  
九、五 東大阪  
九、〇 箕面  
八、五 鳥 取  
八、五 八尾  
八、〇 松原  
七、五 喜屋川  
七、〇 兵 庫

一七 弥 生  
一八 露 杖  
一九 としよ  
二〇 一二三  
以下 略

昭和五十二年度第八回  
「箸」 五句以内  
「昼 寝」 五句以内  
締切 七月二十五日

大陸川柳作家同窓会 (第13回目)

昭和52年9月11日(日) 17時・12日(月)・13日(火) 朝解散。

福島市土湯温泉町・ホテル向流  
会費 一万八千円・先着順前金50人定員制。  
(二泊四食・会津吾妻スカイライン観光・記念写真カラーキャビネ版三枚・会報他)

記念写真カラーキャビネ版三枚・会報他)  
両日共それぞれ一泊二食・写真他・一日一万円。11日夜懇談会宴・記念写真(泊らず)八千円。

12日15~17時・句会・出席のみ・会費不要  
12日句会・同窓会・懇親宴・写真(泊らず)八千円。

題「紅青」「黄砂」「吉吉思汗鍋」「釜山」「いけつ」「福島県」各二句(当日集句)

同窓会員で今回不参者の出句・締切:9月5日  
問合せは↓大陸川柳作家同窓会

一分間の柳論

こんなに奥深く難しいとも考えずに川柳に飛び込んで十三年。人さまの句に教えられ心叩かれ、そして自分の句には至て進歩のないのを認めながら、壁に突き当たっては。それでも先年入院して酸素が取れるとやと握れる鉛筆で、看護婦さんに叱られながらも「生きよ、生きよ」と川柳に励まされて心の安らぎを見つけ、僅か十三年の足跡がこんなに貴重なものかと深くしみこみ有難く感じた事はありません。

「人間陶冶の詩」なら倦まず弛まず誇ら

堀江芳子

ず、長い柳歴を誇る方も初心に戻る心掛けも大切と思います。私は主婦の座を崩さず、あくまでも趣味の域を出ないで自己を見つめて行きたいと考えています。川柳を始めた頃、緑之助先生が「多読・多作」と教えて下さいました。技術者だった亡父が座右の銘とした「技術は終生の修業にして卒業の日なし」を今更ながらのように想い、川柳にも通じる教えと心の中に大切にしています。

670兵庫県姫路市北条250・40 大井正夫  
TEL 0792-22-1233

〒583堺市堀上緑町一三二七  
藤井一二三 大萬川柳係

# 柳界展望

(原稿締切毎月末)

て鑑賞をこころみている書  
コート紙使用、20ページ。  
送料共三百円。〒956新  
津局私書箱15号、柳都川柳

・雨山選」「カメラ・風柳  
選」「弱虫・風来子選」「マ  
ニア・絢一朗選」「向う見  
ず・大雄選」「シヨック・  
茶六選」「はしやく・不二  
也選」席題・放浪児選一同  
・閑人選。投句料五百円。  
あて先〒980仙台市東八  
番丁一七〇後藤閑人方。  
●富士野鞍馬先生から一六  
百号記念・六〇一号共に立  
派。おめでと存じます。  
然るところ老生、5月10日  
に心臓病発作で救急車で  
再入院しました。前回の後  
遺症もあり当分各方面へも  
失礼致しますと。

▼中島生々庵主幹は5月の  
大会月には各地へ出席。公  
職の医師会、余技の青柳社  
日本画展出品等々、相変ら  
ずご多忙である。(6月12  
日、大成閣で玉青先生の黙  
四等旭日小綬章受章記念祝  
賀会が開かれたが、いずも  
大会」とカチ合ひ欠席され  
た)

▼肉筆水府句集「番傘抄」  
刊行記念「水府十三回忌川  
柳句会」(法要と墓参)は  
52年8月6日午後2時から  
3時半まで。(青蓮寺)天  
王寺区生玉町九・大阪女子  
学園北裏)句会は新大阪チ  
サンホテル2F。同日18時  
からあいさつ。近日江砂人  
氏・岸本吟一氏一題「医者  
」。「持つ」「足」「売る」  
「強味」各題3句。会費三  
百円。

▼大野風柳著「鑑賞・川上  
三太郎単語」川上三太郎單  
語の中から20章をとり上げ

▼第13回埼玉川柳大会は7  
月31日10時から埼玉県労働  
会館で開催。第二部が投句  
・出席者も可となったとい  
う。題は雑詠清水美江選ほ  
か・兼題・森・機転・弟・  
静か・走る」締切7月15日  
1投句先〒338与野市下  
落合五七八・大武政徳あて  
▼川柳宮城野社創立30周年  
記念(全国川柳大会・第26  
回東北川柳大会併催)は52  
年9月25日午前10時から宮  
城県民会館で開催。「妥協  
・三石選」「割る・沢心選」  
「とんとん・夕帆選」「底

▼川柳はこたで第19回花童  
子賞は「定期券汚職に遠い  
靴を履き」ほか四篇・大面  
力也「なお同志に北村白眼  
子氏が「懐古随想録(1)」  
を執筆された。本誌四月  
月号「1931年の収穫」  
自選三句集)日本柳壇百人  
撰」から氏の思い出が45年  
前にさかたのる興味深い読  
み物となった。

▼51年度札幌川柳社賞は  
あかしや賞「ネックレス女  
の松田曳いてゆく」ほか四  
篇「松田葉留枝」ばぶら賞  
「嫁が来て母のノックも遠  
ざかり」ほか四篇「小田島  
トシ」幌賞賞「挫折して故

▼第49回奈良県川柳大会  
(5月22日)へ本社から、  
雀踊子・酔々・美幸・漫柳  
鬼遊の各氏が出席。酔々氏  
が天位受賞。

## 短詩形文学

6月創刊  
80頁  
価 700円

一行詩のイメージ  
短詩における原風景  
俳句のリアリズム再検討  
極私的形式論  
時代と詩的現象  
○短詩形文学運動をどう進めるか(座談  
会)○一人一句抄○一頁評論○時評○現代  
川柳論(山村祐)  
●他の執筆者・西垣仁禪子、石原沙人  
山田敏郎、池原魚眠洞ほか。  
東京都足立区伊与町狭間八八七  
西垣仁禪子方  
短詩形文学懇話会

郷の風に会いにゆく・ほか  
四篇「浪越靖政」  
▼51年度「こなゆき賞」発  
表「冬眠子賞・骨箱に入り  
切れない欲を抱き」松田竹  
生」

美幸・漫柳・幸生・亜成・  
鬼遊諸氏。  
▼第20回近県並合同句集  
「竹の里」発刊記念大会は  
52年9月4日(日)午前9  
時開場。会場は竹原市上新  
開スポーツセンター。

▼第一回川柳えんびつ社賞  
は「濡らす役干す役田国孫  
と祖母」ほか9句「坂田裕  
香」帽子屋に打撃陸下の  
ノーハット」ほか9句「鳥  
巢幸柳」が受賞。

▼平安川柳社創立20周年記  
念全国川柳大会が6月5日  
京都ランドホテル2階大  
広間で開催されたが三百四  
十数氏出席の盛会。本社か  
らも主幹をはじめ14氏出  
席。生々庵主幹・小松園・  
薫風・形水・亜鈍・牧人・  
弘生・静歩・酔々・岳人・

▼ふあうすと川柳社主催の第7回紋太忌川柳大会が5月29日(日)神戸木村会館で開催。兼題選考として生々庵主幹他に小松園・水幸・牧人・紫香・静歩・美幸・漫柳・鬼遊の諸氏が出席した。

▼小樽川柳社の新住所は—小樽市奥沢三丁目26—22・長沢方(電話22・02・45番)

▼同人の動向△

▼西尾英氏は薫風氏と5月29日、生駒の葎乃先生を訪問、六百号記念大会の盛会の模様などを報告され、元不朽洞会々員有志からの金一封をおわたしし、先生の健康をみやげに扇阪された。

▼若本多久志氏(西宮市)は目下静養中だが当分は句会などの出席や執筆も休まれます。一日も早い全快を祈ります。(5月12日発行の「日刊自動車新聞」に「凡愚のたわごと」を執筆、週刊誌物として全段ブチ抜き、半ページに光彩を放たれた。

▼尼緑之助氏(出雲市)から—毎日が川柳の仕事で職業柳人みたいな生活です。6月11日朝、NHKラジオ

「朝の訪問」で「五十年を語る」を放送しました。大会では皆様のお世話になり心からお礼を申し上げます。

▼橋高薫氏(豊中)は平安川柳社創立20周年記念全国川柳大会「わたしの主張」で「うがちと定型」を発表。本社の編集長としての貴録を示めされた。

▼小西無鬼氏(兵庫県)から—大会から帰ってから雑用が大に積り、その中にはボーイスカウト兵庫連盟から第一種表彰するから来いし、全く精神的にも疲れてしまいます。

▼河村日満氏(鳥取市)から—六百号記念大会の盛会何よりでした。せんばの谷口光穂君とは同年兵で満州時代の連中とも四十年振りで会いました。

▼藤井明朗氏と堀江正朗氏(鳥根県)から—六百号記念大会の翌日、水客・紫香先生に待望の漫才の角座へ連れていただきました。

▼西いわを氏(藤井寺市)は喉頭炎で6月7日に大阪市東区法円坂町二の一、国立大阪病院中2棟220号へ入院された。一日も早いご退院の日を祈ります。

▼堀江芳子さん(鳥根県)

から—正朗が6月2日大東町の雲南病院へ入院。近く手術をしますが、いずも大会を前にしてショックでございませぬ。病名は胃潰瘍幽門狭窄だそうです。

▼岡崎祥月氏(松江市)5月24日、令息と来社。折悪く一三夫氏が新聞社の人と会う時間だったためロクにお話も出来なかつたことをおわびいたします。

▼若柳潮花氏(高槻市)は三カ月余の病院生活から5月28日めでたく解放された由。

▼八木摩太郎氏(堺市)は白内障の手術で目も快くなり、これから旅行に、執筆に、またガンばりませぬ。

▼大阪北区某氏から金一封編集部をねぎらつてくださった。

▼新谷笑痴氏(堺市)の令息新谷志氏は四月一日から読売テレビ放送局報道部に勤務された。

▽旅 信△

▼竹中肖三氏(東大阪市)から—5月12日羽田発—17日帰阪「ホノルルの歩くひとくげない都心」肖三。

▼松川杜氏(京都市)から—岩の会吟行の上加茂から寄せ書拝受。水客・紫香・白渚氏・客遊子・求孝・杜ビツタリのごげ加減白みそが。

▼汐風川柳社から第23回愛媛川柳研究大会出席有志の寄せ書拝受。一五〇名の盛会。文庫・曉明・宵明・曉童諸氏ほか。

▼橋高薫氏から—秋篠寺—薬師寺等の寄せ書—蓮見弘朗・孤呂二・鶴丸諸氏。

▼7月の句会は10日△

▼菜の花句会は10日6時から西郷会館(八尾神社境内)近鉄大阪線八尾下車南歩一分)で開催。会費三百円。題—犬・手・呼ぶ・赤。席題2題・各5句以内。投句は郵券百円同封・締切当日到着分まで。

〒581八尾市高安町北一

肉体疲労時の  
ビタミンB<sub>1</sub>補給に  
カッケ/ アリナミンA<sup>®</sup>

☆筋肉痛・肩こり・腰痛・神経痛の緩和にも  
☆アリナミンA25ミリ錠のほかに5ミリ錠

タケタ

丁目二五。大路美幸あて。

▼南大阪川柳会は20日6時から松崎町三丁目大萬で開催。題—いじわる・ミステリー・裸・おしほり。

▼川柳東大阪句会は23日6時から東大阪市小阪公民館で開催(近鉄小阪駅南出口正面の小阪本通商店街南へ二百米・三角公園内)題—憂き晴らし・素生・埋まる・スパー。席題二題。

(註)いつもの会場は全館改装のため七月・八月の句会は前記の会場で開催)

# 本社六月句会

会場 金属会館

七日 午後六時

まず生々庵主幹から、若本多久志氏の病状の説明があった。喘息の疑いがあったが微熱があるとのことである。多久志氏の難詠にあるような深刻さはないと思うが、金沢へ帰って静養するようになるかも知れないと、柳人医博としての見解をのべられた。

栞氏がつづいて4月2日に入院して5月19日に退院。胆石らしかったが手術もまぬがれそのダイヤモンドを腹の中に入れて?こうして元気にさせていただきました。ご心配をかけたましたと元気に全快あいさつをされた。

好郎氏の柳話は「初心忘れず」がテーマとなつて、商人が奉仕を忘れぬことが繁盛につながる商法の秘訣であるとし、氏がNHK川柳の選をした最初のころは感激がいっぱいだったが、もう二年にもなると、最近メガネを忘れたりして披露が出来なくなり大騒動をしたことなど、やはり初心を忘れていたのだと

反省をされる。小出智子さんが柳原静香さんの愛嬢が大思いたした時、見舞いに行った病院で北野久子さんと知り合い、いま南大阪川柳会で勉強されているが、五月句会で天の天になり、涙しておられた、この日の初心忘れずはげんでほしいと結ばれた。

今月の月間賞杯は竹中肖二氏。

(受付—児島与呂志・塩満 敏)

(進行—西田柳宏子—記録・高杉鬼遊)

出席—漫柳・雅風・道夫・柳宏子・幸生・右近・柳志・瓢太・一三夫・形水・与史・度・醉升・君子・静馬・凡九郎・吸江・喜風・好郎・岳人・与呂志・寿美子・美幸・弥生・雀踊子・生々庵・ゞ女・太茂津・きみ・幸・天笑・敏・蘭・滋雀・古方・維久子・夕花・一三・三十四・肖二・綾女・勝美・以兆・智子・文秋・一三三・恒明・栞・みずほ・あいき・千万子・川狂子・牧人・鬼遊・庸佑・頂子・薰風・酔々・小松園・葉子。

席題「日傘」

斎藤三十四選

絵日傘が似合う柳の町がある 与史  
傷かくす日傘角度は決めてある 小松園  
ターミナル日傘くるくる待つデート 以兆  
日傘ぐるぐるうれいことがありそう 吸江  
バラソルの後姿は良かったが 瓢太  
贈られた日傘をさして逢いに行く 庸佑

絵日傘が点景となる菖蒲園 肖二  
日傘などいらぬ娘に出来上り 与史  
ワイキキの日傘若さが干してある 美幸  
日傘くるくる恋する乙女かも 綾女  
少々の雨なら役に立つ日傘 文秋  
退院の日傘へ妻の顔が映え 度  
買ったけど日傘眠らず老いの足 雅風  
初恋は遠し日傘の君なりき 鬼遊  
顔見せぬ日傘にこぼれるよい香り 雀踊子  
析が入りいまロップウを踏む日傘 凡九郎  
男から逃げる日傘の影一つ 岳人  
ここでっせえ妻の日傘が上るなり 寿美子  
待ちぼうけの日傘襟足のぞかせる きみ  
風鈴の露地ぬけてゆく日傘 度  
特価デー今日は日傘を忘れて来 好郎  
訥訥と日傘の上からプロポーズ 右近  
ビーチパラソルの下で裸の恋燃える 瓢太  
さしかけた日傘に他人でない二人 滋雀  
ビーチパラソル泳げぬ母が孫を見て 勝美  
逢いに行く日傘の中で蝶になる 智子  
顔かくす日傘と出会い恋がたき 維久子  
蝶が舞う日傘の影にあるロマン 美幸  
絵日傘の恋は小さな鈴が鳴り 柳志  
日傘の女嘘と知りつつ歩を選び 与呂志  
秋風へ日傘のドラマ整理する 幸  
日傘がほしいチュリップが横を向く 生々庵  
プールサイドママの日傘は動かない 維久子

加茂川へ日傘の中からオンベカコ 三十四

席題「罪」

久保田以兆選

たいいたらどなたも軽い罪がある  
 派手に着て心の罪を隠す気か  
 罪のない嘘に茶の間の笑い声  
 女の子の花泥棒は罪とせず  
 母の愛が非行のAにならずすみ  
 勘違いした実印が罪を呼ぶ  
 十字架が罪の重さへ鞭となる  
 美しい女で罪を深くする  
 罪もない子をと三面記事たみ  
 罪深い女で宝石蓄めている  
 強情な父の寝顔に罪はない  
 説教を聞くとき余罪が疼き出す  
 自己嫌悪小さな罪も捨てきれぬ  
 らくがきの中でときめく軽い罪  
 罪と知りつつ人妻を好きになり  
 本心を言わせて酒の罪にする  
 告白して静かな夢になる寝息  
 聖書開く小さな罪なら消えそうで  
 罪のない笑顔と思いだまされる  
 罪のない児までもしかる憂き暗し  
 弁護士が罪を逃れる手を教え  
 靴すべり罪な話を聞いている  
 軽犯罪犯したなどと思つてず  
 罪一つ一つ重ねて生きている  
 方便の嘘がじわじわ罪つくる

敏 右近 好郎 与史 三十四 幸 滋雀 肖二 雅風 牧人 維久子 美幸 夕花 幸 瓢太 千万子 一二三 君子 みずほ 喜風 みずほ 智子 柳宏子 綾女 静馬

兼題「演技」

高杉鬼遊選

念仏に悪人罪を自覚する  
 一寸したはずみ思わぬ罪つくり  
 履歴書に書かねばならぬ罪一つ  
 花散らす風には何の罪もない  
 コンピューターに罪をかぶせた無責任  
 放心で犯した罪の深さ知る  
 罪裁く職に居ながら罪がって  
 無意識な動作が罪につながる  
 罪犯し反省もなき世相なり  
 石段の途中で痛む軽い罪  
 検札へ罪の意識がうるたえる  
 ウィンクが大きな罪となる火種  
 罪ひとつ三面鏡の奥にある  
 先輩の罪をかぶって左遷され

拗ねて見る演技たまにはいかがです  
 べべ着ると童女習わぬ品つくる  
 Uターンさせた演技のシルエット  
 象の演技へなぜか涙が湧いてくる  
 不況裡に耐える演技の上手下手  
 演技だとあとでわかったネオン川  
 ウィークエンダー地に落ちている演技  
 演技派の涙玉ねぎなどいらぬ  
 演技力ありすぎるから疑われ  
 毎日が本番生きている演技  
 演技する女の指はきれいだね

醉々 柳志 恒明 あいき 滋雀 庸佑 瓢太 千万子 美幸 瓢太 美雀 夕花 以兆 寿子 弘生 優 一栄 としよ 登美也 登美也 岳人 寿美子 千万子 雀踊子

馬鹿な演技代紋の捨ぜりふ  
 金借りる演技に妻も狩り出され  
 少年の目犬の演技に嘘を見る  
 ピッチャーが片足揚げている演技  
 ホステスの演技誰にも惚れてみせ  
 演技ではなかったパンダのプロポーズ  
 見物も舞台の馬鹿に口を開け  
 葬儀屋の脚本通りの演技なり  
 身銭まで切つて演技にのせられる  
 照れかくし女房叱って置く演技  
 時効のない演技がつづいている夫婦  
 悪筆も演技に見える無心状  
 能面に憂いの浮ぶ名演技  
 演技するゆとりウルトラCがある  
 CMの演技が夏を攻めにくる  
 一票を欲しさに演技する笑顔  
 懸命な演技を影よ嗤うまい  
 酔うたふり酔わないふりして女  
 姐の上の演技は動かない  
 観客の方がほんとの涙ふき  
 倦怠期過ぎて演技はもう要らぬ  
 演技など知らぬ少女の涼しい瞳  
 生涯を演技に遠き父の鎌  
 六月の雨にアジサイ演技する  
 演技力 拔 群 妻 の 涙 声  
 月給があがる演技でハイという  
 母の涙演技であるうははずがない

喜風 与呂志 雅風 あいき 一三天 静馬 太茂津 滋雀 小松園 柳志 吸江 肖二 度 醉升 好郎 岳人 一舟 みずほ 酔々々 夕花 与呂志 与呂志 美幸 夕花

演技してます影が揺れてます 道夫  
 演技では出せぬ涙と宥される 柳宏子  
 一代の演技が遺書に盛つてある 幸生  
 見えずいた演技のはやるポナス期 度  
 貸さぬ氣を貸す氣に変えてきた演技 一二三  
 父の眼が演技を篩い分けている 漫柳  
 繫がれた犬で演技をしてしまう 智子  
 太い尻尾がときどき見えている演技 智子  
 妻の演技は朝の靴を軽くする 君子  
 もの乞いの腕に演技が置いてある 幸生  
 笑うてるとも悲しい演技です 太茂津  
 軽い演技で妻をたのしくしてやろう 天笑  
 まだ生きていますと海老の名演技 鬼遊

兼題「手足」

児島与呂志選

大の字を小さい手足で児はねわり みずほ  
 手足となる人へ長い手紙を書いてます 維久子  
 春の宵手足が欲しい姫ダルマ 夕花  
 手足となつとこ甘い汁がある 恒明  
 候補者の手足となつて違反する 一三夫  
 部下という手足いさかしげれとり 寿美子  
 満足な手足で神にそむき生き 一舟  
 墓洗う手足を攻めてくる蠶蚊 酔々  
 手足が裏切る仏性腹だたし 生々庵  
 ポスの手足ようばらばらになりよつて 古方  
 手足みな絶叫となる車椅子 美幸  
 俺に要る手足の妻と娘たち 与呂志

兼題「放言」

戸田古方選

大臣の放言分析すればゼロ 登美也  
 放言を吐いてわたしに腹がない 一栄  
 悪意ではないが放言許せない 夕路  
 放言して四つ角をまわりけり 酔々  
 小者でも放言もとで時の人 みずほ  
 無礼講とはいへ放言悔まれる 優  
 酌きこぼす放言を聞くまるい月 優  
 放言を集めて随想録と言う どんたく  
 放言だった親分の勇み足 弘生  
 老人会の放言知事もかまじまり 秀峰  
 放言も愛嬌として聞き流す 三十四  
 大声で好きと夢では言えたのに あいき  
 口一杯言つて終つてから慌て 小松園  
 ここだけの話と何処でも喋り 小松園

兼題「窪み」

菊沢小松園選

華麗なる放言いたすらつぱく笑う 生々庵  
 放言のツケが余りに大き過ぎ 右近  
 放言のあとの天井の低いこと 栗  
 娘の放言時には可愛いなと思ひ 維久子  
 放言にうっかり本音が出てしまひ 牧人  
 放言をかばう女がひとりだけ 天笑  
 放言とは本人少しも思つてず 綾女  
 放言を無邪氣に聞いている絵本 幸  
 性は善そう放言が信じさす 凡九郎  
 放言を又吐きそうなへそ曲り 酔升  
 放言の通りになつてあわて出し 三十四  
 大物の放言小ものがあわてだし 与呂志  
 さわがれてまだ放言と思つてず 一舟  
 放言をするにも矢張り要る資格 凡九郎  
 放言は女の居ないとこでする 酔々  
 豪快な放言へ稀枯れている 岳人  
 放言にじつと堪えてるパンの耳 夕花  
 放言を打ち消す舌が乾いてる 君子  
 放言のまあまああととふりむかず 古方

人生の窪み点滴の針を受け 弘生  
 面影を追う横顔の片笑窪 寿子  
 あばたともえくぼとも見える窪み 秀峰  
 朗らかな妻の寝顔に窪みみる 柳信  
 露路裏の窪み赤貝殻で埋め 登美也  
 落ちこぼれ集まってくる補習塾 よしお  
 急いでる足をくぼみにはばまれる  
 何人の男だました片えくぼ 柳宏子  
 性こりもなく補道の窪みにけつまずく 生々庵  
 ベトナムの孤児の食器は手の窪み 一三天  
 パス道の窪みはガイドの唄になる 三十四  
 窪みにも夏の光りが差してくる 敏  
 鳩尾の窪みに深い過去がある 岳人  
 また窪み乗り越えてゆく亀見つめ 好郎

運のない男がうめている窪み 好郎  
 手の窪みそこに女の歴史見る 一三天  
 名も知らぬ兵士が眠っている窪み 弥生  
 手の甲の窪みをなでるといし日 榮  
 楽園の窪みに兵士の骨がある 美幸  
 ご予算に合うた窪地の後始末 きみ  
 まな板のくぼみ家計を知り過ぎる 恒明  
 石段の窪み仏のありがたし 鬼遊  
 幾山河越えた肋骨の窪みなり 太茂津  
 姐の窪みに母の物語り 幸  
 窪みある途とは女思つてず 維久子  
 窪みから本物という嘘ばれてくる 幸生  
 大小の窪みが考古学をする 栗  
 窪んでる車が事故を物語り 雅風

緑陰の窪みに歴史が埋めてある 与史  
 雨だれが庭の窪みではね返える 庸佑  
 雨上りの窪みへ満月落ちている 君子  
 戦艦の窪みそのままプラモデル 岳人  
 馴れた道窪みをさけた千鳥足 柳宏子  
 雨だれに窪んだ石の歳がある 滋雀  
 雨だれが作る窪みで蚊が育つ 一三天  
 墨つぼの糸はくぼみに妥協せず 千万子  
 雨だれの石の窪みは飾られる 小松園  
 行き届く神様ツボは小さな窪みです (河井庸佑・整理)

### 川柳塔社常任理事会

(六百号記念川柳大会役員懇親宴と合流)  
 これより先きに(5月26日)緊急役員会議  
 が開かれた。

議題は大会の会計報告その他だが、結果的  
 には6月3日の常任理事会がこのようなかた  
 ちになったので、この日の会議はムダでなか  
 ったようである。

「旅人」の売れ行き好調。10冊、20冊とい  
 う注文で残部が少なくなった。ご協力感謝。

(多久志・好郎・小松園三氏欠席)

出席・生々庵・栗・形水・薰風・一三天諸氏

6月3日午後6時から心齋橋の大成園で、  
 大会役員と常任理事会がテーブルを共にして  
 大会の成功と役員諸氏の労をねぎらう宴がも  
 たれた。

まず生々庵主幹が起つて、役員諸氏に大会  
 の成功を感謝され、そのあとへ多久志副理事  
 長が病氣静養のため、こししばらくは理事会  
 などにも欠席することを報告された。

栗大会委員長は大会以後退院され、かつて  
 の氏の明朗さをとりもどし、禁煙すると若が  
 えるという体験談などもとび出し、会場は笑

いの渦が巻くところ、酒とビールが派手に動  
 き出す。

主幹は今日阪急百貨店で開かれている直原  
 玉青先生の「青玲社日本画展」に作品を出し  
 ておられるしご多忙だった。とにかく今日で  
 出席の方々は健康であることに感謝されてい  
 ることであらう。

出席・岐江・一三天・敏・与呂志・生々庵・  
 静馬・文秋・滋雀・形水・太茂津・肖二・雀  
 踊子・メ女・柳宏子・岳人・鎮彦・牧人・弥  
 生。

▼前号P64中段「趣味」の14行目「民謡で  
 嫁姑の気がそろい」松子は満津子と訂正。



▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

菜の花句会

高杉鬼遊報

明日また逢うのに女の後を追う  
ホステスのほくる今夜はついていず  
追って来る筈の女が消えていた  
出で発ちのさてそれからの長い坂  
折鶴の肌は千羽であたためる  
泣き虫の肌も確かに夏である  
技芸天の母で送らぬことにする  
再出発、炎は抱かぬことにする  
弱い意思また出発のねじを巻き  
たとえ葉書でも折り目忘れない  
ホステスの子は姉ちゃんと呼ばされる  
叩いたらすぐ泣く女で猫を飼う  
ホステスの昼は戸籍の名で暮らし  
遠慮を知らぬ葉書の生れつき  
堅実なホステス笑顔で子の学資  
机叩いても叩いても規則です  
ホステスの縦には振らぬイヤリング  
一枚のはがきが血を噴くこともある  
ホステスは二二んが六の胸算用  
職場へ出発かあちゃんのラッパ鳴る  
川柳わかやま

津田与史報

灰皿にその日の気分遊ばせる  
青年と対でしゃべれる気分の日  
丹念に撰って恩師に詰める柿  
問い詰めてわかればなしへ行き戻り  
行き詰まる一休さんに母の顔  
煮詰まらぬ話へ時計だけ廻り  
詰め込みの出来ぬ頭と母知らず  
憶病のおかげか今日も生きている  
計算にちゃんといれてた憶病さ  
憶病なポケットの中汚れてる  
仁王さんの裏は憶病かも知れぬ  
憶病の方が好きよと逆転し  
憶病な夫婦家計簿など書かぬ  
憶病に見せてたしかな世を渡る  
青年の主張吹き矢を溜めている  
青年の汗に飢えてる土である  
朝焼けに立つ青年のブロンズ像  
青年の夢に大きい虹がある  
青年の主張寄り途などしない  
何日あがる火花を抱いている青年  
どんぐり川柳会 谷垣史好報

公彦 天彦 一風 大輪 富子 緑楼 道光 道夫 武雄 白光子 寿美数 寿美子 正博 和子 恒治 英子 登記夫 好郎 醉々 美幸 鬼遊 小松園 薩ヨ 薰風 岳人 吸太 飄太

山田季賛著

遺句集『鉄道草』

季賛さんほどみんなから愛された川柳家はすくないと思います。あの人がそのまま一九〇ページに収められています。B6版・上製箱入(ご希望の方は送料共千円)左記へお申し込みください。広島県竹原市竹原町田中(振替広島二四二八四)竹原川柳会・山内静水あて。

何時となく朝のホームに列ができ  
結ぶ紐とかず切らずに来た夫婦  
列外にあつて一步がふみ切れぬ  
社運いま社長の結んだ口にあり  
凡人の芝居に汗は欠かせない  
列乱す若い男の黒眼鏡  
二日酔要らぬ社用を笠にきせ  
一寸した話しが結ぶ縁となり  
行列を乱す男の河内弁  
南大阪川柳会 中川滋雀報

太陽に勝る無欲が見つからず  
掌を合わせても凡人無欲にはなれぬ  
日々好日無欲になつてはげている  
一人だけ無欲が居つてまともならず  
素晴らしいヒントをくれた四月馬鹿  
ライバルにヒントを与えていた飲み屋  
手のとどくところに聖書が置いてあり  
以心伝心確かにとどいた気配する

弘里 万里 真砂 惠美子 眞美彦 喜風 誠二 史好 鎮彦 鎮彦 君香 静香 好郎 肖二 綾女 鬼遊 凡九郎



むらくも観桜大会

藤井明朗報

風邪に寝る妻の福相あたたかし  
密室でゴキブリ少しあわてたり  
頬撫でるばかり妥決の線が出ず  
どじよ掬い唄と合わなない三味を抱く  
勇退の日福よかな顔になつていた  
若返りの秘決秘密一つ持ち  
鐵運のよき來福につながらず  
天才はどこか抜けてるような顔  
福耳は儲かる話ばかり聞き  
ともかくも一服つけて考える  
心願の禁酒に伏せてある秘密  
秘密ない夫婦屈託なく笑い  
司会者のうかつうかつかり名を忘れ  
抜けるよな空の碧さが歩かせる  
円満へ握り潰している秘密  
香りまだ密かにポロリ沈丁花  
うっかりと言つた心へ悔のこる  
女独り猫の背を撫で愛理める  
庭石を撫でれば生きてた石の肌  
悲しみを切り抜ける等と再起する  
密室はわたしの趣味でないと言う  
考えの中に仄かな鈴の音  
下準備してもうっかり忘れて居

川柳たけはら

森井善居報

花をかう男にさせるタキシード  
人を恋う火鉢ジュンジュン湯がたきり  
男対男二才と風呂に入る  
頑固にも愛嬌があり逆えす  
例えばの話の中に父と母  
寒菊のごと花嫁にある気品

水客 紫香 独仙 祥月 孤呂二 鶴丸 軒太楼 竹馬 晃男 柳慶 日満 登美也 快哉 正朗 芳子 白汀 孝華 秀子 文子 みどり 雪美 虎秋 明朗 蘭幸 静水 文晴 松緑 鬼焼 房子

つくりの針一針一針亡母想う  
生甲斐を見てくれ筆が踊つてる  
屋の月むなしきものの一つなり  
隙のない女におつたスボンサー  
男と女の嘘がよはじまる春の音  
六色の虹でもよろし再起の日  
宿題はないけど頭がいたい熱  
勳章がそろそろ欲しい鬼である  
雪おんな雪より白い身をこがす  
きれいな空と言われきれいだと思  
騙されているとは鏡喋らない  
ちびた靴ちびた男が履いて冬  
笑うても泣いても西へ陽が沈み  
坂こえた安堵へあくま矢をつがえ  
紅葉の手夫婦の夢を蒔いところ  
城北川柳会  
古地図に首をかしげて一人旅  
ほとぼりを待って再起の手をのべる  
洗たくに追われて暮らす子沢山  
医者に許可もろうて旅の老夫婦  
高主留守生命の洗たく羽根のばす  
満艦飾の干し場に妻の笑がある  
野の花に思い出があり旅衣  
洗濯物デッキに干して船は行く  
旅人の心みたして湯はあふれ  
気儘旅つづけていますと羨やませ  
旅行費の予算が化けるランドセル  
妻の日曜洗たく物から先ず始め  
時刻には出来ぬほとぼり抱く女  
洗たくが好き姑の気に入られ  
川柳東大阪

竹中肖二報

寛子 鈍舟 笑子 花炎 不居 菁居 愛己 政光 千代美 一路 英詩 かつ子 西合 洋之祐 右近 道子 星斗 満津子 秀村 灼斎 弘生 つね 喜代子 ますえ ふみ 恵美子 三十四

得心を  
させて

煙にまく奇術

(敬一)

関西奇術教室

雀踊子 潮風 綾女 凡九郎 誓二 三十四 右近 あいき 美子 一栄 弘生 雅風 文秋 鎮彦 喜風 肖二 美子 儀一 柳信

きっかけが欲しくて小さな嘘をつく  
きっかけがつかめずお茶がさめていく  
きっかけはシャッター切つただけのこと  
きっかけは笑って済むよな些細ごと  
裏話正直者を怒らせる  
裏話聞いて偶像崩れ去り  
裏話聞いて偶像崩れ去り  
裏話なるほどと思う節もあり  
裏話聞いてもらいたい人がなし  
心ない人がしやべくる裏話  
好奇心満しただけの裏話  
ゴシップが大物おろした裏話  
自惚にピンチを抜ける知恵がない  
自惚れた蝶が死んでたハイウエイ  
自惚の「ヨツシヤ」が総理贖わずかせ  
満ち足りぬ夜の女が酌むワイン  
接点がかめず冷えた茶をすすする  
冷え性の癖して釣りにまた出掛け  
寄り道をさせぬ北風吹きつものり

つるはしが冷えた大地にはねかえり

川柳後楽(岡山市) 井上柳五郎報

夜桜が大胆にする二人仲 鮫虎狼

夜桜をおぼれて自分を見失ない 正道

夜桜を片隅で見る老夫婦 昌吾

夜桜はどちらでもよい二合瓶 佐加恵

恍惚が勝手な時に目を覚まし 元一

なにもかも忘れて花の酒に酔い 定平

恍惚の父に陛下が棲んでい 久米雄

恍惚に引き込む芸の道遠く 照路

度忘れを恍惚にされ妻ともめ 柳五郎

恍惚とみせて本心表わさず 三平

横文字は知らぬが舶来追いつづ 勝

横文字を使えば売れる絵白痴 博友

茶柱を呑込んで好運取り逃し たけ志

静寂を破る茶釜の動く音 梁太

作法も知らぬままに抹茶よばれ 恒洋

京都塔の会 松川杜報

病室へ妻が育てた花が来る 潮花

おばあちゃんの靴でも踵ちと高い 杜的

今日もまた暮れたり街の灯がともる 美穂

苦にならぬ土間は濡れても春の雨 求芽

飛び石を蛙一つずつ逃げる 笛香

花便りことづけられて京を発つ 明代

人間にたとえて時計修理され 白溪子

べんちやを云うなと嬉しそうに酌き 耕三

駅前前の広場で主義を売りつける 飛鳥

火事地震なければ広場忘れられ

月面の広場で降りた夢に酔い

浮動票捨合う広場へ選挙カー

お見事なコブへ童話めく心

目の上のこぶになりたくない私

柳の芽別れる道と知っている

堺川柳会句会

八木摩太郎報

旧姓のころの夢かも母も居り

うたた寝の夢とは惜しいめぐり逢い

甘達の子ばらしい夢消されてやる

甘い夢世の荒浪に打ち消され

夢えがく独楽は一つの位置を占め

鯛に箸つけて全快祝われる

お手元の和紙に旅館の格を知る

海外で割箸出して呉れた店

お年玉チラリお箸へ子のピンチ

酒の無い晩は静かな箸枕

永楽

誠史

和友

よし子

水客

徳子

茂美

ミツエ

柳影

育園

一二三

勝美

東雲

儀一

小松園

愛情の箸が集まる孫の口

悲しみは今日の御飯に箸を立て

箸紙の寿へくむ初春の幸

この人の気性そのまま箸せわし

外人の箸は手を添え教えられ

振り向けば無心な顔の仏たち

プロなみの素振りへギョルについてこそ

みこの振る鈴を頭の上で聞き

振りむける過去の恋なら許そうか

ハンカチを振ると消えて行くあなた

振り返るゆとりと出来たコンバクト

駒つなぎ川柳会(大阪府)

看板に賭けるおやじの味自慢

看板で客が来るのも男まえ

遠出して思いもとけて今朝の雪

若者は一寸グワムへハワイまで

清女

邦子

宏子

千万子

幸太郎

鎮彦

草春

与一

つき子

笑痴

天笑

岸南柳報

ひとし

南柳

祥恵

石捨

### 一分間の柳論

凡夫なるが故に悩み、惑う。かと言つて、人間廃業もままならないとすれば、精神的転化策を自ら見つけざるを得ない。何故ならば人それぞれに孤独であるが故である。宿命の哀しさに気付く時、川柳効用のありがたさを私はかみしめるのだ。我々は少なくとも川柳を媒体に、ある時は反省し、エゴを排除し口びるに唄をとり戻す。その体験の積み重ねを「やっつけていよかつた。」と言う表現で柳縁に感謝している筈である。それならいい。それならば結構な

### 森井菁居

のである。ただ同好の士の中に、仮りに社会通念上許し難い行為を見解の相違なる美名のもとに抹殺する者が居たとしたら川柳の冒瀆であり、全体への挑戦であつて、川柳活動そのものが無意味と言ふべきであろう。人間的に生長してこそやっつけている価値感があり自己陶冶への貴重な歩みと受けとめている私である。上手、下手は二の次と思う。人生のよりどころとして、自己反省の場として、「川柳をやつて」と叫びたい。

一言を名刺がわりにする女  
名刺より固い握手の友に逢い  
役付の名刺の影に妻の顔

一流は後姿も顔かせ  
おちぶれた後姿に声追わず

付け馬の後姿の感の良さ  
新婚の後姿に湯気が立ち

喪服着た後姿も泣いている  
憧れの後姿に影があり

犯人の後姿だけ覚えてる  
ライバルに後姿は見せまいぞ

娘の晴着後の線をたしかめる  
春の陽が後姿に呼びかける

満ち足りぬ後姿は泣いている  
これきりの後姿に散るさくら

山本富士子と後姿は変りない  
オースケイ川柳会

昇進の夢は消えてる生字引  
見えなくなるまで風船見上げる障害児

棒グラフ昇りと初めてる物価高  
天までも昇れと初孫抱きあげる

タクシーの列が崩れた雨あがり  
紙屑に貰が一本残った

傘届くじぶんになって雨あがる  
退院を目の前にして恋をする

天国と地獄へ行って退院し  
退院をねたみと祝いのが眸が送る

退院のめし目の旨さにホッとす  
病院にいても同じだという退院

姑の退院に妻は複雑  
退院に母は電気を暗くして

大坂形水報  
小松園

つとむ 雅風 善信 勝美 はやを 規不風 茂子 肖二 儀一 綾女 信治 小路 宏子 柳信 潔 木石 重成 一念 孝夫 みどり 聖地 博泉 清武 松尾 栄 健坊 有岡 諸岡 秀川

退院に再会約す人が出来  
昇進の噂家路へ真すぐに  
椅子一つ空いて昇進意識する  
アベックがどこにいたのか雨上り  
大の眼が用訴える雨上り  
夕焼けを待つ鍵っ子へ雨上る  
退院の日に聞いて来た滋養食  
昇る陽が大きく見えてきた決意  
南海電鉄川柳会(大阪市)辻  
いっどこで落したんやと無理を云い  
落し物したばかりにうそがばれ  
立ち合ひの巡査が笑らう落し物  
麻雀の四人が立った落し物  
骨壺のこれは不思議な落し物  
落し物知らせがあった日の安堵  
落し物出て来て新聞種となり  
落しましたで済みそうにない蔵の鍵  
警察の扉が軽い落し物の  
落し物こそこそ捜す内緒金  
ねこばとときめられてる落し物  
お守りを落して気持落ちつかず  
歩み寄り見せて積まれた示談金  
虹川柳倶楽部(唐津市)新岡回天子報  
わが街の山笠太鼓の音で聞き分ける  
短冊を傘に吊して花野点  
短冊にする程の句はまだ出来ず  
一部屋に家族を寄せて去る春雷  
花散って静になつた城の跡  
学歴を捨てて才媛凡に生き

前田 常生 野扇 形生 弥生 入仙 好郎 圭水 摩太郎 圭水 儀晴 邦和 正二 肖二 宏子 柳信 綾女 維久子 雅風 昌水 鎮彦 勝美 誓二 五木 照沖 広坊 岩光 桑原

金釘の字も短冊で生きている  
農薬に蛇も蛙も呑みこまれ  
夜がくるたび産めない乳をなぐさめる  
弔辞聞けば極楽行の人はかり  
夜店の灯買う気の人を見逃さず  
ミグのこともあってソ連の高姿勢  
露天将棋妻は夜店を見て廻り  
池上の会式太鼓に暮を開き  
音楽の行進太鼓でしめくくり  
和歌山七面句会  
踏切を全身で押す車椅子  
野良犬の尾を振らぬのも自覚めく  
子の為と云うまい人生半ば話  
踏切りのあいつも知らず立ち話  
踏切りを恋猫飛んで行つてもた  
自覚症状なくて癌とは残酷です  
テレビ漫画子供暫く仲直り

中筋三幸報

春吉 金志郎 愛郷 一竿 柳竜 勝一 紫浪 虹汀 回天子 其夕 武雄 佐知子 智水庵 光治 隆恵 勇次

# PRの欄

当会も一周年を迎えました。これを機会に構想を新にした運動に入りたいと思  
います。永らくの御協力を深謝致します  
と共に次回から倍旧の御援助をお願い致  
します。

〒664 兵庫県伊丹市西野外川原  
十一の七〇

「ゆうもあ川柳会」

榎谷漫柳

子なし妻赤いフトンを犬に縫い  
背の子は地球を丸い目で眺め  
悲しみが解けゆく児の掌小さくて  
子を盾に妻の銃口背に受ける  
青春の自覚がすぎて悔い残す  
不具の子に町内一の鯉のほり  
硝子拭く子供のあとを母が拭く  
まるべに川柳会

子の合格重い冬からホットする  
セーターがやっつ編めたら春でした  
春の靴女を外へ出したがり  
南朝の史蹟を訪えば花吹雪  
ひとりでは絵にもならない京の雨  
声援は判官びいきの甲子園  
電話口娘と間違われ妻得意  
動けないベッドへ雀が声かける

昭子 遺されたテープの美声聞く周忌  
凡夫 怪談の後でトイレに連れさがす  
和美 帰りに別々に出る二人連れ  
三井が丘川柳会  
昌三郎 いつもより早よ目の覚める日曜日  
ふく代 高田博泉報  
三幸 古本の埃はたいて売る夜店  
弘 人形の臉にうすすら見た埃  
千恵 スイッチを入れる間わびて長話  
つき子 給料日靴の埃が拭いてあり  
星斗 家中のスイッチ確認して眠る  
好郎 燈台もスイッチ切って夜が明ける  
一於 春愁や御飯のスイッチ入れ忘れ  
茂児 スイッチも切って連休はじまりぬ  
道子 埃くらい積っていても死なへんワ  
スィッチも直せる亭主見直され

武水 かんずめが埃をかぶっている八百屋  
和子 スイッチの音から朝が走りだす  
飄太 詰衿の埃が目立つ五月の陽  
幸子 スイッチを握られていた弱味  
右近 見合いの日心のスイッチ共に押す  
江留美 スーパーへ主婦の座守る籠をさげ  
眉水 黙もくと埃清めていく左遷  
琴音 沈む夕陽が都会のスイッチ押ししていく  
よしひろ スーパーが進出揺らぎ出す老舗  
隆子 主婦の知恵スーパーの目玉見逃さぬ  
草生 掌に乗りて払う仏の掌の埃  
あいき ビリビリッとききたスイッチに弱いばく  
新之助 スーパーで逢えば柔かな鬼課長  
加代子 手拭で埃をはたく茶がはいり

闊病生活に体をもて余していた頃、見よう  
見真似で捻りだした一句が読売新聞島根柳壇  
で活字になったのが私の川柳への滑りだしで  
す。  
43年「偽りと言わさぬ母の愛の目が」の句が読売新聞  
社賞を受け、田舎者の心を飛びあがらせる程の嬉びでし  
た。  
ちょうど、その頃、人生のこの大きな峠(闊病)から  
一日も早く動くべし、と言う意味で「出雲からさで会」  
の主幹から贈られたのが私の雅号です。いささか名前に  
負けて足踏み状態ですが、時おり妻の吹く進軍ラッパに  
勇を得ている昨今です。

### 雅号ぶっっちゃけ話 (160)

かどう



大 峠 可 動

おおこえ

(会社員 42歳)

よく似た似た羅漢も世相なげく顔  
迎え酒したらと妻は笑うだけ  
貯金帳私大合格喜ばず  
おいおいと古稀まで妻を呼び続け  
死んだとは一寸ひどいよ四月馬鹿  
肝臓をなおす薬に胃をやられ  
忘れてた球根二年目義理で咲き  
本当かそれか本人つれてこい  
岸和田川柳会  
植山武助報  
牛を売る予約固めの手をやる  
死神は予約販売などしない  
嫌いだと思いつらも義理に落ち  
大げさな嫌い嫌いへ増す噂  
ポスターのヌードまともに満員車  
花束の笑顔が消えている楽屋  
舞妓さんの涙か京の五色豆  
野也子 三念  
恵美子 一念  
たけし 淡泉  
ミチ子 度  
亜成 度  
博泉 度  
一菁 度  
亜鈍 度  
珠笑 度  
柳報 度  
ひろ坊 度  
無一人 度  
太一郎 度  
虹灯 度  
秀峰 度  
ひろ坊 度  
三和 度

かんずめが埃をかぶっている八百屋  
スイッチの音から朝が走りだす  
詰衿の埃が目立つ五月の陽  
スイッチを握られていた弱味  
見合いの日心のスイッチ共に押す  
スーパーへ主婦の座守る籠をさげ  
黙もくと埃清めていく左遷  
沈む夕陽が都会のスイッチ押ししていく  
スーパーが進出揺らぎ出す老舗  
主婦の知恵スーパーの目玉見逃さぬ  
掌に乗りて払う仏の掌の埃  
ビリビリッとききたスイッチに弱いばく  
スーパーで逢えば柔かな鬼課長  
手拭で埃をはたく茶がはいり  
ゆるもあ川柳会  
極谷漫柳報  
ひろ坊 度  
無一人 度  
太一郎 度  
虹灯 度  
秀峰 度  
ひろ坊 度  
三和 度  
こう 度  
みづほ 度  
民治郎 度  
武助 度  
三志郎 度  
白光子 度  
操子 度

# 会句忌郎路社本

日時 七月七日(木) 午後六時  
会場 金 属 会 館  
南区鰻谷東之町10番地  
電話 271・3935番

兼題 「愚ぶ」 「畳」 「修業」 「雲の峯」  
柳話 中島生々庵  
(今月の出題・香川醉々)  
席題 香川醉々 岩本雀踊子 西田柳宏子 西尾菜選  
費題 二題 当日発表 各題三句以内厳守  
★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います  
大阪市南区鰻谷中之町20

川 柳 塔 社

8月の兼題 [高 原] [氷 菓]  
[走馬灯] [対 談]

8月句会は8日(月)

9月句会は7日(水)

10月句会は9日(日)

11月句会は7日(月)

12月句会は7日(水)

お願い!

同人費や購読費は早目に  
ご送金ください。  
ご連絡がないと送本を中  
止いたします。  
ご協力のほどお願い申し  
上げます。

川柳塔社運営部

## 募 集

### 九月号発表(7月15日締切)

川柳塔(10句) 中島生々庵 選  
水煙抄(10句) 菊沢小松園 選  
愛染帖(3句) 橘高薫風 選  
課題吟(各題5句以内)

「防 災」 塩 満 敏 選  
「残 暑」 安平次 弘 道 選  
「敬 老」 大山と 金 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。  
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

### 十月号発表(8月15日締切)

川柳塔(10句) 中島生々庵 選  
水煙抄(10句) 菊沢小松園 選  
愛染帖(3句) 橘高薫風 選  
課題吟(各題5句以内)

「預金高」 王 置 重 人 選  
「縁結び」 大江 秋 月 選  
「読 書」 岡 村 久 志 良 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字  
は楷書で新かなづかいにしてください。

## 一人の遅稿 大ぜい困る

定 価 四 百 円 (送料29円)  
半 年 分 二 千 五 百 円 (送料共)  
一 年 分 四 千 八 百 円 (送料共)  
昭和五十二年六月二十五日印刷  
昭和五十二年七月一日発行

大阪市南区鰻谷中之町二〇番地

編集兼 発行人 中 島 蓬 太 郎

印刷所 藤 原 童 心 社

郵便番号 542

大阪市南区鰻谷中之町二〇番地

発行所 川 柳 塔 社

電話 大阪・二七一―三九八五番  
振替口座 大阪・三三三六八番

・ペンペン草・

★麻生路郎物語・完結  
 ★昭和50年一月号から実に31回、堂々二年七か月の労作「麻生路郎物語」が本号をもって完結。東野大八先生、ありがとうございました。さすがにプロのペン、最終回まで魅了しつづけた。三百数十枚は柳誌の新記録となるでしょう。  
 大会はやりの年

★三月の日川協第一回全国川柳大会をトップに、五月は本誌の六百号記念川柳大会、六月にはいって平安川柳社の20周年記念のほか、川柳会50周年記念のほか、今年ほど記録的な大会の多かった年はちょっとめづらしい。関西では五月の紋太忌、七月の路郎忌、八月の水府忌と大先達を偲ぶ旬会がつづく。これは永遠のものであろう。

★柳界の二百カイリ  
 ★かつては読者の獲得戦のようなのがあった。他社の旬会へ行く人をチェックした時代もあって、現在のように共存共栄？なんてものはなかった。「一柳人三柳誌」は、常識になっていくようである。なかには10誌近くも購読しているような人を見かけると、各地の柳誌を見てみると、オヤこにもとその精力的な作品

▼菓子コーナー

▼日本米よりアメリカのお米の方が値も安く味も良いと、ニューヨークに滞在中の藤村涼子さんから聞きました。  
 ▼外米はバサバサで粘りが無いものと無知な私は思っておりましたが。  
 ▼あまりに美味しいお米なので、親を持ち帰ろうとして税関に取り上げられたと言うお話もありました。お米はいいが、親はいけないらしいです。

★参院選にも二百カイリはない。  
 ★参院選にも二百カイリはないが新人の進出は？。

新人やーい

★ここ数年前から上方漫才の危機説が飛んでいる。拙著「川柳寄席」の「芸人の根性テレビでゆがめられ」も言われているが、寄席の灯が一つ二つと消えていった。そんな中で若手芸人の廃業である。次代になろうこれらの若手の逃避にも問題があるようだ。

★これは他人ごとではないのである。ご承知のようにここ一、二年、物故作家が多く、そのわりに新同人が

ふえていない。そこへ退会者もあり、決して楽観のできる状態ではない。本誌には主幹を軸に、社長業で経営学のおレキレキが運営部におられるので、われわれは親船に乗ったつもりで川柳の勉強さえしておればよいのだが、そこはやはり同人雑誌である以上、数年前に展開したように読者の倍加運動をお願いしたいと思えます。  
 ★暑中広告ありがとうございます。  
 (不二田一三夫)



**Toray**

**EASY CARE / 手のかからないせんい**

**東レ株式会社**

**東レインコート**



うまさをそのままお届けします  
**アサヒビール**

ASAHI  
 朝野社一  
 Lager Beer  
 Pilsener Beer  
 100% Malted Barley  
 Brewed in Asahi, Japan

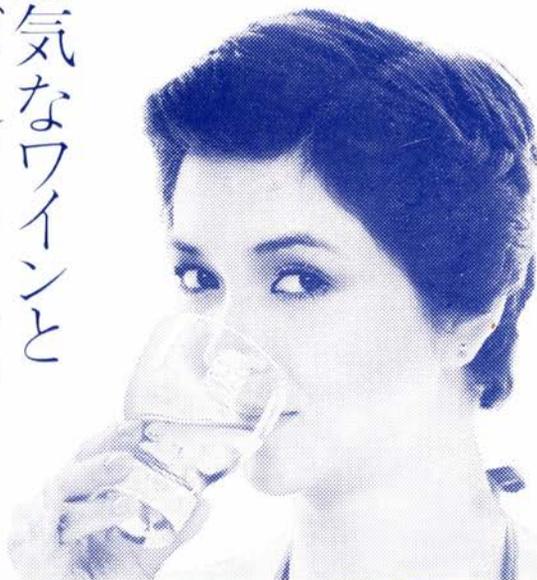
昭和四十二年一月二十九日  
 昭和五十二年七月二十五日  
 創刊大正十三年 通巻六〇二号

第三種郵便物認可  
 発行(毎月一日発行)

川柳塔

七月号

陽気なワインと  
 呼ばれています。



サントリーワイン  
**デリカ**

●サントリーワイン(デリカ)

赤・白・ロゼ……………各600円

スペシャル]赤・白……………各800円

●サントリーワイン(デリカ・タイム)

1,000ml]赤・白・ロゼ……………各800円

500ml]赤・白・ロゼ……………各450円

200ml]赤・白・ロゼ……………各200円

価格はすべて標準的な小売価格です。

(製造・販売サントリー株式会社)

南紀 和歌山 四国でのお泊りは——

# 南海電鉄サービスチェーン

## 《ホテル・旅館》

白浜温泉——忘れぬ はまゆうの宿

政府登録国際観光ホテル **ホテルパシフィック**

政府登録国際観光旅館 **朝日**

勝浦温泉——海に浮かぶパラダイス

政府登録国際観光旅館 **中の島**

湯峰温泉——山のいで湯で山菜料理

政府登録国際観光旅館 **湯の峯荘**

和歌山・新和歌浦——海岸美が楽しめる

政府登録国際観光旅館 **萬波**

徳島・鳴門——うずしおの宿

政府登録国際観光旅館 **鳴門**

政府登録国際観光旅館 **鳴門公園ホテル**

紀北・橋本——ゴルフの宿で季節料理

観光旅館 **紀の川苑**

大阪・泉南淡輪——魚つりに ゴルフに

観光旅館 **淡の輪苑**

大阪・なんば——清楚で近代的なホテル

**ホテル南海**

お問合せ・お申込み ■ 南海国際旅行・日本交通公社

サービスチェーン大阪案内所

☎06-631-0222



# 南海電鉄

定価 四百円 (送料・二十九円)